

平成 30 年 4 月 13 日

平成29年度未来創造セミナー実績報告

草津市総合政策部草津未来研究所
アーバンデザインセンターびわこ・くさつ(UDCBK)事業

1. 未来創造セミナーの目的

未来創造セミナーは、草津の未来を良くしたいという志のある民が集い、「交流」しながら、回毎に設けられた特定テーマについて専門家の講義(話題提供)と参加者間の対話(ワークショップ)により深く「学習」する場です。基本的には講義(話題提供)と参加者間の対話(ワークショップ)の二部構成としています。

なお、ワークショップはある課題について答えを纏めることが目的ではなく、参加した人々同士がそれぞれの考え方の違いを知り、ワークショップ終了後に参加者それぞれが深く考え、その結果を次のワークショップ等に反映することをくり返しながら、草津の未来のまちづくりについての自らの考えを纏めていくことが目的です。

このプロセスで話し合われた内容を参考にアーバンデザインスクールや調査研究や社会実験事前調査事業などを実施し、草津の未来の選択肢を増やすことを目指しています。

2. 今年度のUDCBKのテーマ

UDCBKのメインテーマは「健幸都市」の実現です。今年度はサブテーマとして、「交通」「琵琶湖」「文化」を設定しました。

(ア) メインテーマ「健幸都市」について

草津市は平成 28 年 8 月 28 日に「健幸都市宣言」を行い、「健幸都市基本計画」を策定しました。健康都市基本計画では、「まちの健幸づくり」、「ひとの健幸づくり」、「しごとの健幸づくり」の三つの基本方針を掲げています。それぞれの基本方針と基本施策は次頁の「表. 計画の体系」のとおりです。

UDCBKには、都市空間デザインの専門家としての機能と産学公民連携のプラットフォームとしての機能の二つがあります。都市空間デザインの専門家として「まちの健幸づくり」に、産学公民連携のプラットフォームとして基本方針「しごとの健幸づくり」の基本施策「大学・企業等の連携」にかかわります。

表. 計画の体系

基本方針	基本施策		施策の内容	
まちの健幸づくり	1	出かけたくなるまちづくり	1	歩いて暮らせるまちづくり
			2	安全・安心に配慮した公共空間の整備
			3	賑わい、うるおいの向上に向けたまちの環境づくり
	2	交流機会や健康拠点の充実	1	交流機会の充実
			2	健康拠点としての草津川跡地公園や各地域の公園の活用
ひとの健幸づくり	1	地域の主体的な健康づくりの推進	1	地域の特性に応じた健康づくり
			2	支え合いのコミュニティづくり
	2	個人の健康づくりの推進	1	全世代に共通した健康づくり
			2	ライフステージに応じた健康づくり
しごとの健幸づくり	1	地域産業と連携した健康産業の活性化	1	ヘルスツーリズムを含むヘルスケアビジネスの育成支援
			2	特産物を活かした健康な食等の推進
	2	大学・企業等との連携	1	産学公民連携とその仕組みづくり
			2	健康に関する情報提供

(イ) サブテーマについて

上述の「都市の健幸づくり」の評価項目を実現するために今年度はサブテーマとして、「交通」、「琵琶湖」、「文化」を設定しました。それぞれの狙いを以下に記します。

① 交通

草津市は通過交通と生活交通が重複しており、特に南草津駅や草津駅周辺では慢性的な渋滞が発生しています。一方で、琵琶湖湖畔などは公共交通が発達しておらず、車がないと生活が困難な環境にあります。

このような課題を解決しつつ、「出かけたくなるまちづくり」を実現するため、世界や全国各地の先進事例を取り上げ、草津での実現の可能性を議論します。

② 琵琶湖

草津市のまちづくりについての市民意識調査の「都市のイメージ」では、「水と緑にあふれた自然豊かなまち」が常に上位となっています。また「地域資源」の調査では「烏丸半島など琵琶湖畔」が一位になっています。琵琶湖畔の景観や琵琶湖と関係する文化財や文化資源は「出かけたくなるまちづくり」の「賑わい、うるおいの向上に向けたまちの環境づくり」の核となりうる可能性があることから、琵琶湖と地元の人との関わりを知り、新たな活動のヒントとする機会

を設けます。

③ 文化

平成 29 年 7 月に制定された「草津市文化振興条例」の基本政策には、「文化によるまちづくりの推進」、「文化を通じた出会いおよび交流の創出」、「文化的資産の継承および活用」などがあります。文化活動は生活習慣や社会参加、生きがいなど「ひとの健幸づくり」に繋がり、文化活動が盛んな地域は社会関係資本が充実している傾向があることから、健康長寿とされています。このような文化活動を行うためには、活動を行える安全な空間、出会い、交流する都市空間、そして具体的なストーリーが必要です。

そこで、新しい価値観や技術と結びついた新たな文化を創造する空間、活動、そしてストーリーを検討するため、古くからの草津の文化を知る機会を設けます。

3. 未来創造セミナー固有のテーマ選定

UDCBK は、「しごとの健康づくり」にかかわる「産学公民連携とその仕組み作り」としてハード面（ハード）、及びソフト面（ソフト）の検討、及び「まちの健幸づくり」にかかわる「交流機会の充実」としてサードプレイス（家庭でも職場でもない第三の居場所）としての機能（サービス）の提供も求められていることから、これらについてもテーマとしました。

（ア）ハード

UDCBK が産学公民連携のプラットフォームとしての機能を果たすために必要なレイアウトや備品等ハードについて利用者とともに考える。

（イ）ソフト

UDCBK が産学公民連携のプラットフォームとしての機能を果たすために必要な対話の進め方や基本的な考え方などソフトについて利用者とともに考える。

（ウ）サービス

UDCBK がサードプレイスとしての機能を果たすために必要なサービスを検討する。

4. 未来創造セミナーの実績

No.	分類	開催日時	テーマ	講演者	参加人数
1	ハード	2017/6/9(金) 18:30-19:30	新しく生まれ変わる UDCBK	及川清昭氏 (UDCBK センター長) 武田史朗氏 (UDCBK 副センター長)	23
2	ソフト	2017/8/5(土) 10:30-12:00	市民も変わる、行政も変わる!! オープンガバナンス	奥村裕一氏 (東京大学公共政策大学院 客員教授)	16
3	ソフト	2017/8/26(土) 14:00-15:30	草津ってどんな感じ? ～目印、遊び場、気になる場所～	山口純氏 (（一社）エスコラ理事)	34
4	ソフト	2017/9/15(金) 18:30-20:00	予測不能な時代の 未来のまちづくりを考える	小林傳司氏 (大阪大学理事・副学長)	23
5	サービス	2017/10/18(水) 18:30-20:00	みんなでつくる 「まちライブラリー」	磯井純充氏 (まちライブラリー 提唱者)	20
6	文化	2017/12/8(金) 18:30-20:00	「感じて、ふれて、ベトナム！」フェスタ ができるまで ～外国からの人々と野路町の人々の ハートフルなものがたり～	デイン・ティ・ドン・フウーン氏	25
7	ソフト	2018/1/6(土) 10:30-12:00	草津に生まれ育ち、そして 草津を離れて気づいたこと ～All For One すべては草津の未来のために～	山元圭太氏 (（株）PubliCo 代表取締役 COO)	44
シリーズ 地域で語り継がれる港の物語り ～湖上交通が盛んだったころの記憶・思い出～					
8	交通 琵琶湖 文化	2018/1/20(土) 14:00-15:30	常盤に語り継がれる港の話 (常盤の民話集より)	読書グループ松葉会	24
9		2018/2/3(土) 14:00-15:30	「急がば回れ！」の語源の地 矢橋の渡しへの思い	辻浦岩水氏	29
10		2018/2/24(土) 14:00-15:30	大津と山田を結ぶ定期船の思い出	竹川貞雄氏	42

No.1 未来創造セミナー実績報告

1. 開催日時:平成 29 年 6 月 9 日(金)18 時 30 分から 19 時 30 分
2. テーマ:新しく生まれ変わる UDCBK
～誰でもが気軽に自由に活用できる創造的空間を目指して～
3. 講師:及川清昭UDCBKセンター長、武田史朗UDCBK副センター長
4. 開催場所:UDCBK(市民交流プラザ オープンスペース)
5. スケジュール
18 時 30 分 UDCBK新拠点について
～誰でもが気軽に自由に活用できる創造的空間を目指して～
19 時 00 分 ディスカッション
19 時 25 分 新拠点移転スケジュール及び今後のUDCBKの予定
6. 参加人数:23 名
7. 報告
 - (1) UDCBK新拠点について
資料に基づき、UDCBK新拠点のコンセプトを説明したあと、センター長、副センター長からコメントしました。
<及川センター長より>
 - 将来的にジオラマを設置する予定。
 - 新拠点のイメージは、草津の歴史を表す色を取り入れており、ワークショップスペースの床は宿場町、通路は土間をイメージした配色としている。そして、草津の色(自然の色)は緑色ということで、キッズスペースは緑色にした。その上に、草津の未来を描く場所となるよう、様々な色で様々な形にできる空間を作り、そこに人々が集い彩を添えるというコンセプト。
 - UDCBK のカラーでもある、緑・赤・青を柱のクロスに取り入れる予定。<武田副センター長より>
 - UDC の特徴は大きなワンルームである。スケルトンがいい、天井も床もはがした感じがいいとの意見もあったが、安全性を考慮し、内装する。
 - 新拠点は、あえて作りかけの状態という認識で、皆様が UDCBK を様々な使い方によって創り上げていく空間である。

(2) ディスカッション

Q:トイレは3つも必要なかったの、2つになってよかったです。トイレにおむつ替えシートはありますか？

A:あります。

Q:授乳室がないように思うのですが。

A:授乳室は設けておりませんが、女子更衣室を代用として使用していただきます。御使用の際にはスタッフにお声がけください。

Q:点字ブロックがないように思います。室内に点字ブロックを置くと展示物などの障害になる場合があるので、可動式の点字ブロックを導入し、出入口に呼び鈴を設置するのはどうでしょうか。

A:点字ブロックは室内にありません。8月オープンに向けて、今すぐには無理ですが可能なことは取り入れられるよう考えていきます。全面ガラス張りになりますので、中からも外の様子がスタッフの目にもとまりやすくなり、常にお声掛けできるようにしていきます。

→(意見)予算の制限もあるので今すぐには難しいと思いますが、今後検討してもらえればと思います。

Q:草津の色は緑色と言われましたが、あおばなの青色というイメージがあります。

A:あおばなの青色か琵琶湖の青色か草津の空の色の青色か、また、青色でもカラートーンによって様々な青色がありますので、どれに該当するかわかりませんが、正面左端に縦に青色のクロスを施工します。

Q:観葉植物はありますか。今の場所に置いてある観葉植物は全てもっていかれますか。

A:全てではありませんが、一部持っていきます。

Q:地元野菜のプランターなどは置けませんか。

A:野菜のプランターは難しいかと思います。

Q:照明の明るさは、細かい作業用とワークショップ用とではルクスが違うと思います。今は利用に応じて調整できるものがありますが、それは導入されないのですか？

A:UDCBKはずっと何かを作業する場所ではありませんので、照明は一定です。

Q: スポットライトの方向の調整はできますか。

A: かなり高度な位置に設置するため頻繁に方向を変えることはできませんが、方向調整は可能です。しかし、基本的には展示物を照らすものとして考えています。

Q: 開室時間はどうなりますか。

A: 今と同じになります。しかし、利用状況等をみながら今後検討することも考えております。

Q: ホワイトボードは固定ですか。可動式のホワイトボードでパーテーションのように仕切りとして使えないのですか。

A: キッズスペースのホワイトボードは固定ですが、備品で購入予定のホワイトボードは可動式です。ただし、オープンな空間ですので常に仕切っておくことはできません。

Q: 新拠点を企業のインキュベーション的な使い方はできるのか。そこで知り合った方と就職活動的な活動につながっても法的に問題はないのですか。

A: 就職先の斡旋をする場所ではありませんが、UDCBK は出会いの場所でもありますので、使用については問題ないです。

Q: その日行われるイベントの案内板はどこに設置されますか。外ですか中ですか。

A: 外では雨に濡れて傷んだり、通行の妨げになったりするので、中から外に向けて設置します。

Q: プロジェクターは固定ですか。

A: 今使用しているものを引き続き使用しますので、可動式です。

Q: スピーカーはありますか。

A: 埋め込み式のスピーカーを4つ設置します。

Q: コンセントは床についていないのですか。

A: 入口から左壁側にいくつか設ける予定ですので、延長コードで使用してもらいます。通路側はよく人が通るので、延長コードに引っかかると危険ですので、左壁側にしました。

→Q: そうなると誰かが躓いたりしてパソコンが壊れたら誰が責任取るのですか。

A: 人の導線は右側ですのであまり支障がないと考えます。例えば、パソコンをよく使う人はコンセントが設けてある側に寄るなど、皆さんでアイデアを出しながら創り上げていただければと思います。

Q:トイレは法律に基づいたものですか。

A:多目的トイレでは車いすが旋回できるスペースは確保しています。

→Q:オストメイトはありますか。

A:簡易のものがあります。

→(意見)いろんな障害を持った方がおられるので、新たに草津市の施設を作るなら、段階的でいいのでユニバーサルな空間になればいいと考えます。

(3) 新拠点移転スケジュール及び今後のUDCBKの予定

新拠点への移転のため、7月28日(金)から31日(月)は休室日として、8月1日(火)に新拠点開室を予定。

No.2 未来創造セミナー実績報告

1. 開催日時:平成 29 年 8 月 5 日(土)10 時 30 分から 12 時
2. テーマ:市民も変わる、行政も変わる!! オープンガバナンス
～チャレンジ!! オープンガバナンス 2017(COG2017)」に挑戦!～
3. 講師:奥村裕一氏(東京大学公共政策大学院客員教授)
4. 開催場所:UDCBK
5. スケジュール
第 1 部
10 時 30 分～10 時 40 分 「アーバンデザインセンターびわこ・くさつ」御紹介
第 2 部
10 時 40 分～11 時 30 分 御講演
市民も変わる、行政も変わる!! オープンガバナンス
～「チャレンジ!! オープンガバナンス 2017(COG2017)」に挑戦!～
11 時 30 分～11 時 40 分 地域課題候補発表(COG2017)
11 時 40 分～11 時 55 分 ディスカッション
11 時 55 分 今後の予定 アンケート記入
6. 参加人数:16 名
7. 報告
 - (1) UDCBK の紹介
冒頭、担当よりオープンガバナンス、オープンデータと関連づけ、アーバンデザインセンターびわこ・くさつ(UDCBK)は、草津のまちの未来を考えるために多様な人々が気軽に自由に話し合う場であること、その対話はデータに基づき、必要に応じて新たなデータを収集して確かめることが重要であり、それがこれから御講演いただくオープンガバナンスと共通していることを説明しました。
 - (2) 奥村先生による御講演
「市民も変わる、行政も変わる!! オープンガバナンス
～「チャレンジ!! オープンガバナンス 2017(COG2017)」に挑戦!～」

① 「チャレンジ!! オープンガバナンス」の紹介

2017年度の「チャレンジ!! オープンガバナンス 2017(COG2017)」の実施概要と2016年度に実施したCOG2016について説明がありました。



写真1 COG2017の説明する奥村先生

② デザイン思考について

今後COGを進めるにあたって、デザイン思考という考え方について説明いただきました。

- デザイン思考でいうデザインは日本のように色や形など外形的なものだけでなく、制度やコミュニケーションの方法なども含む広い概念である。
- デザイン思考はベンダー思考ではなく、ユーザー思考であり、様々な専門家が設定した課題に対して、ユーザーが自由に話していることや行動を観察し、専門家が課題解決するための製品やサービスなどをデザインしていくプロセスである。
- もともとデザイナーは、最初から形や色を決めて作品を作っているのではなく、身近にあるものを使い、何度も試作を繰り返しながら、完成させていっている。これを政策立案や製品やサービスの開発に応用した。
- まちづくりには完成ということではなく、永遠のベータ版。

③ Thick Data(濃い情報＝定性情報)とThin Data(薄い情報＝定量情報)

データには、Thick Data(濃い情報＝定性情報)とThin Data(薄い情報＝定量情報)がある。Thick Dataとは、人々の語りや行動など主観的なデータである。Thin Dataと

は、アンケートの集計や各種統計、あるいは測定データ等の数字であり、客観的なデータである。今までは政策やイノベーションを検討する際には(Thick Data は科学的でないとして)Thin Data のみであったが、デザイン思考は、Thick Data 中心、すなわち人間中心に考えていくが、Thin Data を無視したり、軽視するのではない。Thin Data は Thick Data を外形づけ、補完する役割を果たす。

④ UDCBK への期待

UDCBK は多様な人々が草津の未来について気軽に自由に意見を交換しあい、実現のための社会実験を行う場であること、UDCBK は都市空間デザインの専門家として都市空間デザインを提案していくが、UDCBK には多様な専門家や市民、学生が参加していることから、オープンガバナンスの拠点となりうる。UDCBK に期待している。

(3) 地域課題候補発表(COG2017)

市の都市計画課景観グループより、地域課題候補の主旨について下記の説明があった。草津市では、景観を生かしたまちづくりを推進し、美しい景観を市民共通の財産として次世代に引き継いでいくため、「くさつ景観百選」を選定。制定後、一部入替を経て概ね6年を経過したが、当初の課題である個性ある良好な景観を守り育てるための啓発とさらなる魅力的な景観資源の発掘、再発見につながっていないことから、活用方法についてアイデアをいただきたい。



写真2 地域課題の説明をする職員

(4) ミニワークショップ

地域課題である「景観百選」を題材にデザイン思考の考え方について学ぶミニワークショップを実施しました。ミニワークショップでは、次のような意見が出ました。

- 景観の選定理由や歴史などの説明がない。
- 景観の場所、アクセス方法、周辺のお店などの情報がない。
- 景観ルートについても近くの景観をつなげただけで景観同士を結ぶストーリーがない。

ミニワークショップはデザイン思考の基本であるにユーザー目線での考え方を理解するために実施しましたが、上記のように今後の検討に役立つ意見がでるなど有意義なものになりました。

8. まとめ

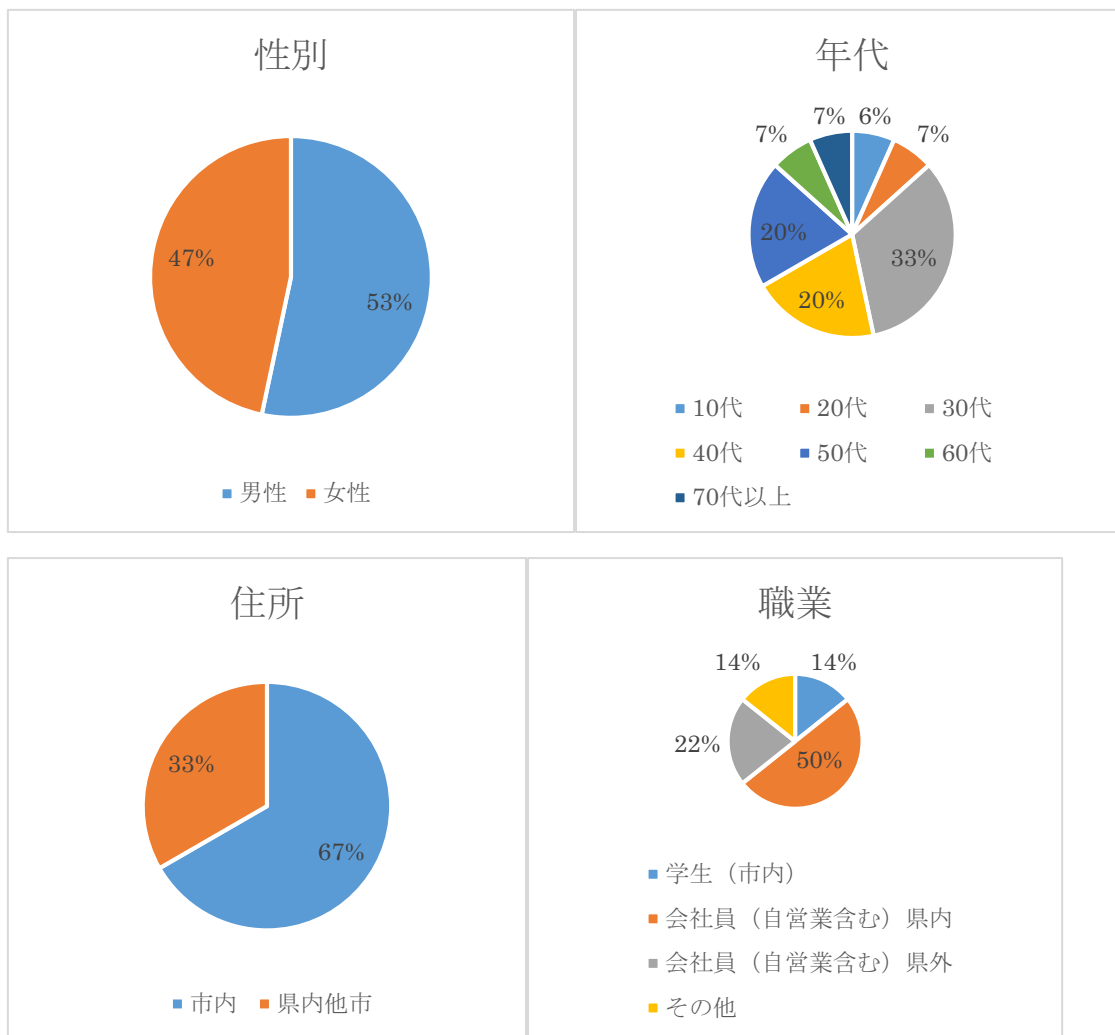
UDCBK の定義するデザインとは、モノのカタチや色だけではなく、制度や活動の方法までも含めた多義的なものです。UDCBK の目的は、対話や社会実験を積み重ね、未来のまちをつくるための選択肢を提示することであり、まさしくデザイン思考的な取り組みと言えます。ワークショップのデザインも開かれたまま終わるエスノグラフィー的な手法です。

奥村先生のお話をお聞きして、これからのUDCBKに必要な機能は検討のためのデータを単に集めるだけではなく、新たなデータを生み出す活動の萌芽を支援すること、将来的には集まったデータ間の相関関係を見つけ、包括的に未来のまちをデザインいくことを確認しました。

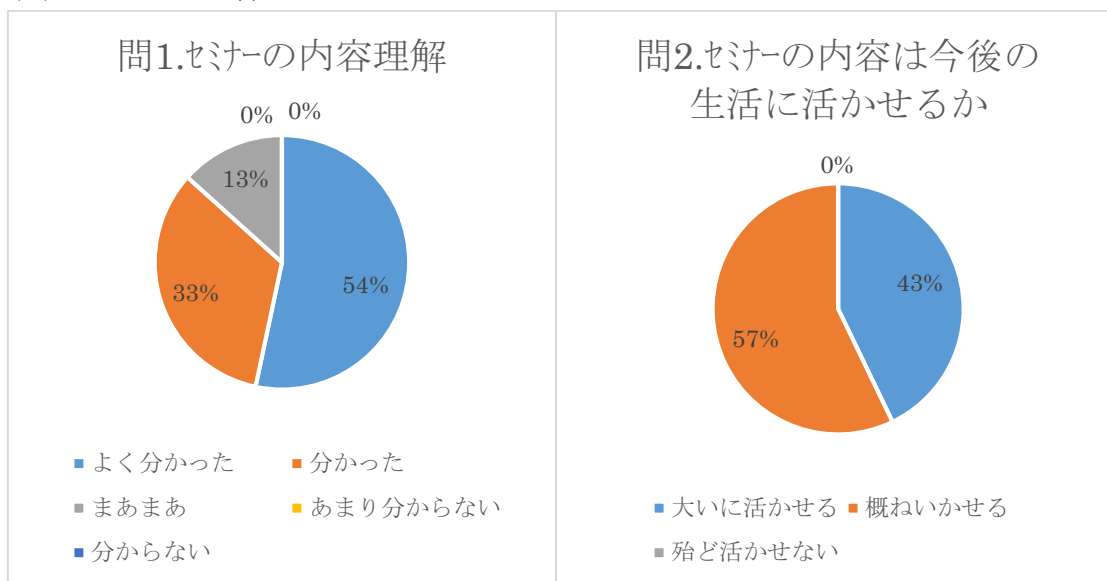
9. アンケート結果

参加者 16 人のうち、アンケート回答者 15 人、回答率 94%でした。

(1) 参加者属性



(2) セミナーの内容について



(3) セミナーの内容に関する主な感想、意見

- さまざまな立場の意見をお聞きでき、楽しい時間でした。
- 明るい雰囲気良かった。
- いろんな意見が出ておもしろかった。
- ゆっくりした進行でとても楽しかったです。
- 市役所がいないぐらいとは、市民のアイデアを引き出すスタンスを柔軟に大事に、ていねいに考えていけたらいいですね。
- もっと深めたり広めたりがワクワクと想像できる内容でした。行政の内でもっと盛り上がってほしいです。

No.3 未来創造セミナー実績報告

1. 開催日時:平成 29 年 8 月 26 日(土)14 時から 15 時 30 分
2. テーマ:草津ってどんな感じ? ～目印、遊び場、気になる場所～
3. 講師:山口 純 氏(京都大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了
博士(工学)建築家、一般社団法人エスコラ理事)
4. 開催場所:UDCBK
5. スケジュール
14 時 00 分～14 時 15 分 導入:なぜイメージマップか?
14 時 15 分～14 時 55 分 草津のイメージマップを描く
14 時 55 分～15 時 15 分 話し合い
15 時 15 分～15 時 25 分 話し合いの共有
15 時 25 分 アンケート記入、記念写真等
6. 参加人数:34 名
7. 報告
(1) 導入:なぜイメージマップか?



写真1 講義する山口先生

- 記号とは、対象物(ほんもの)の代わりにするものであり、記号は新たな解釈(行為・活動)を生み出す。
- メニューに書かれた料理は食べることができないが、オーダーしたり、値段をみて、高いから店にはいるのをやめさせたりできる。
- 地図の上に建物を建てることはできないが、目的地にたどり着くことや便利な場所に家を建てさせることはできる。
- 客観的な地図は数理的な手法を用いた専門家による都市デザインを生み出す。
- イメージマップは個々の経験や思いを描いた主観的なものであり、正確なもの(ある必要は)ない。
- 市民が描いたイメージマップは市民の対話による(未来の)都市デザインを生み出すことができる。そして、都市デザインの専門家に数理的な手法では導けない都市デザインの可能性を提示する。

(2) 草津のイメージマップを描く

参加者のみなさんにそれぞれの草津市のイメージマップを描いていただきました。



写真2 ワークショップの様子

① 話し合い

各グループでお互いのイメージマップを紹介しあい、イメージマップとして表現されたお互いの草津市のイメージを話し合いました。

② 話し合いの共有

それぞれのグループのメンバーが描いたイメージマップを貼り出し、最も印象に残ったイメージマップを紹介しました。



写真3 発表

アイスクリームマップやランチマップなど個性的なマップで、みなさん熱くアイスクリームへのこだわりなどを語っていただきました。マップの特徴としては、市内在住者が描くマップには、大学(または自宅)と駅やショップなどの経路を中心として生活圏を描かれる傾向が強く、琵琶湖や旧東海道、本陣などの記載がほとんどないが、市外の方が描く地図には琵琶湖が描かれていることなどに気づきました。

一方、市の様々な委員を務められた経験のある方の地図は市全域を正確に描かれていたことが印象的でした。

8. まとめ

セミナーの企画段階では、参加者が考える草津のランドマークと主な移動経路というネットワーク的なマップをイメージしていましたが、参加者が描いたマップは物語性を持った思いが溢れるマップでした。

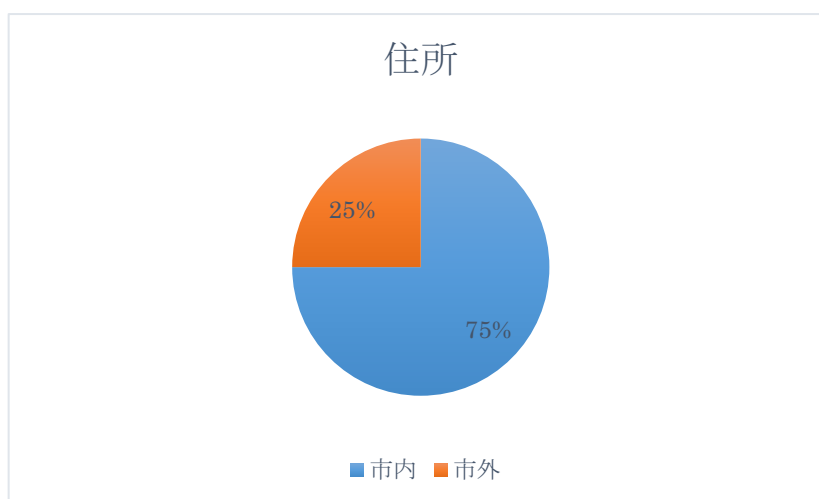
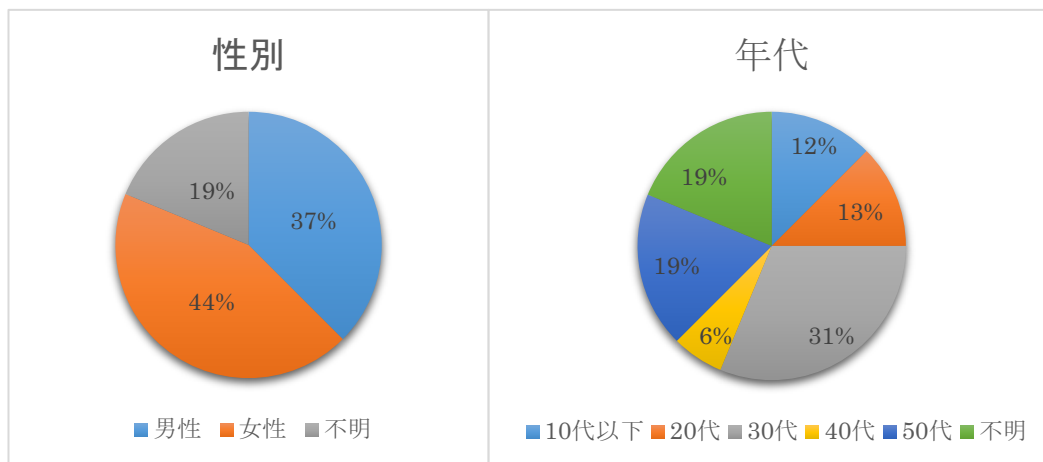
今年度のテーマは「交通」、「琵琶湖」、「文化」です。テーマは昨年度のワークショップでの参加者の議論や発表を聞いた中で、どうも琵琶湖との関わりや宿場文化について言及が少ないという印象を持ち、今年度のテーマに「琵琶湖」と「文化」をあげました。

今回のワークショップでマップに琵琶湖や旧東海道、本陣などが描かれていないことで確認ができたことで、テーマ選定が適切であったと考えられます。

9. アンケート結果

参加者 34 人のうち、アンケート回答者は 16 人、回答率は 47%でした。

(1) 参加者属性



(2) セミナーの内容に関する主な感想、意見

- 草津市は軍配のような長方形／車移動の方が多い。
- 地図の活用の多くが食べ物(おいしい場所)であった。やはり人の生活に食が大事であることが良く分かった。
- 人によって興味のある場所がちがう！！いろいろな視点のマップ集、おもしろそう。
- 同じ街に暮らし過ごしていても、認知のしかたがそれぞれちがうこと、またその違いも想像以上だった。
- ネットで調べるよりも知りたい重要な情報がいっぱいだった。
- よく行くところを伝え合うだけで楽しみが広がることを実感しました。

No.4 未来創造セミナー実績報告

1. 開催日時:平成 29 年 9 月 15 日(金) 18 時 30 分から 20 時
2. テーマ:予測不能な時代の未来のまちづくりを考える
～科学に問うことはできるが、科学だけでは解決できない問題への対応～
3. 講師:小林傳司氏(大阪大学 理事・副学長)
4. 開催場所:UDCBK
5. スケジュール
18 時 30 分～18 時 40 分 「アーバンデザインセンターびわこ・くさつ」御紹介
18 時 40 分～19 時 55 分
まっとうな物事の決め方とは?～課題先進国日本の『課題』～
19 時 55 分 アンケート記入、記念写真等
6. 参加人数:23 名
7. 報告
 - (1) 「アーバンデザインセンターびわこ・くさつ」御紹介
アーバンデザインセンターびわこ・くさつ(UDCBK)について、今回の御講演内容と関連づけ
て説明を行いました。
 - UDCBK は予測不能な未来のまちづくりについて産学公民、多様な人々が対話して、そ
れぞれが未来のまちのあり方を深く考える場である。
 - 価値観が異なる人はその人なりの考えで、未来のまちについて考えていること、その未
来のまちのイメージが違うことを知り、指標(データ)などを参考に互いの活動を気にし
ながら、全体として最適な未来を創ることである。
 - これは(特定の)科学に問うことはできるが、(たったひとつの)科学だけでは解決できな
い問題であり、対話の仕組みが必要である。
 - UDCBK は都市空間デザインの専門家としての側面を持つが、あるテーマでは専門家
ではない。市民は草津の暮らしの専門家と言える。このように市民と専門家は入れ替
わる。
 - 今回は、このような観点から「まっとうな物事の決め方とは?～課題先進国日本の『課
題』～」というタイトルで小林先生にお話しいただく。

- (2) 「まっとうな物事の決め方とは？～課題先進国日本の『課題』～」
引き続き、小林先生に御講演いただきました。



写真 1 講義する小林先生

- 災害大国、人口減少と高齢化、低成長社会、膨大な国家債務、地政学的リスクの増加など日本はもはや課題先進国であり、従来の欧米先進国の後追いではなく、自ら解決策を考え、試行錯誤していくしかない。
- 原子力や人工知能など科学技術の高度化・複雑化により科学だけでは解決できない問題(トランスサイエンス問題)が現れたこと、i-Pod 化により必ずしも選挙で選んだ議員と考えが一致しない問題があることなど、科学者や政治家等専門家集団だけに任せることができなくなっている。
- 市民の多数意見に従うポピュリズムではなく、市民の意見を傾聴したうえで、政策を決定していく必要がある。
- 一方で、意見を聞く市民、そして意見を聞く場の正統性、信頼性が問われる。
- 市民参加の階梯(はしご)では、最終的に市民参加ではなく、市民による制御である。
- 賛成・反対ではなく、徹底した対話に基づく意思決定プロセスが必要であり、会議を運営するファシリテーターの役割が重要であるとして、リスクコミュニケーションの歴史やコンセンサス会議の事例を紹介いただいた。
- その結果、市民は専門家が規定した問題を問題にしているのではなく、もっと大きな問

い、つまり我々はどんな世界に住むことを欲しているかを議論したいことがわかった。

- 従来の日欧の政府や専門家の基本的発想は、市民は科学的知識が欠如している(欠如モデル)ので、科学に基づく安全性を市民にわかりやすく丁寧に説明すればいい(市民がわからないのは説明の仕方が悪い)。科学にゼロリスクなどありえない(想定した範囲内での安全性であり、想定していないことは保証できない)。ではなく、専門家と市民はそもそも問題としている領域が違う。
- 上記に対応する新たな市民参加の手法として、WWViews や国民的議論を紹介いただいた。
- このような WWViews や国民的議論の難題として、社会的対立の激しい問題の取り扱い、(活動家でも無関心でもなく)ふつうの市民をバランスよく集めること、標準化された手法(同じスケジュール、同じ討論テーマと同じ質問、同じ資料とビデオ)が挙げられた。その中でファシリテーターの役割は時間管理と中立性、誘導なし、だけが焦点化されている。
- あらためて、なぜ「市民参加」か、高学歴化による価値観の多様化(i-Pod 化)、既存の意思決定方法(審議会、委員会)の機能不全、代表制民主主義の制度疲労などがあり、これらを乗り越える市民参加型手法への期待が高まっている。
 - i-Pod(itunes)の登場により、文脈を無視して好きな曲を好きな時に好きな順番で聞くことができるようになった。昔のアナログのレコード(やマスメディア)の場合、聞きたくない曲も聞かないといけませんが、一方で、供給側は曲の順番や構成などシナリオを考えていた。i-Pod 化により、政治など様々な分野において自分が関心のあるテーマには専門家並に詳しいが、それ以外のテーマについてはふれる機会が少なく、無関心になっている。
- 従来の政策合意は専門家が決めたことを承認するプロセスなので、ファシリテーションは不要であったが、いわゆる科学による答えがなく、パターナリズム(権威)が通用せず、i-Pod 化した市民が参加する手法ではファシリテーションが必要である。
- 議論のイノベーションに向けて、議論の OS(オペレーションシステム)を変える必要があり、まだまだ課題が多い。
- 実践している方々に聞くと参加メンバーの固定化の問題と意思決定のあり方として正しいが、方法がわからないとの悩みを抱えている。談合や強力なリーダーが独裁的に決めるのが良いとの意見もあり、市民参加は前途遼遠である。

(3) 主な質疑応答

- ファシリテーターの資格や育成方法について
汎用的なファシリテーターの育成は日本ファシリテーション協会が、科学技術コミュニケーションのファシリテーターの育成は科学未来館等が行っている。遺伝子治療のコンセンサス会議を開催したころはファシリテーターって？という感じであったが、今は 300

人規模のワークショップを開催しようと思えば、1グループ10名として30グループになるので、ファシリテーターが30名必要だが、この規模のワークショップができるまで人材が豊富になった。しかし、どんなテーマでも対応できる汎用的なファシリテーターがいるのか(といっても付け焼刃的に勉強はする)、テーマに関する専門知識を持つ人がファシリテーターをした方がいいのか、まだわからない。

- 議会(議員)の役割について

市民参加の手法が一般的になったとしても議会は必要であると考えている。最後の意思決定は議会ですべきである。参加する市民は選挙等で選ばれたわけではないので、適格性が問われるほか、持続性がなく、責任がもてないからである。ただし、議会には市民参加手法による意見を真摯に検討する必要がある。

8. まとめ

小林先生の講義から、未来は予測不能なため、政策等について合意を形成することは難しく、合意を形成するために様々な国や機関で試行錯誤が繰り返されていることがわかりました。

UDCBKは、産学公民連携のプラットフォームとして、自由に気軽にアイデア等を出し合い、調査研究でアイデアを具体化し、社会実験によりアイデアを試し、未来の選択肢を増やしていく場であり、合意形成する場ではないが、合意形成するための材料を提供する場としての可能性を感じました。

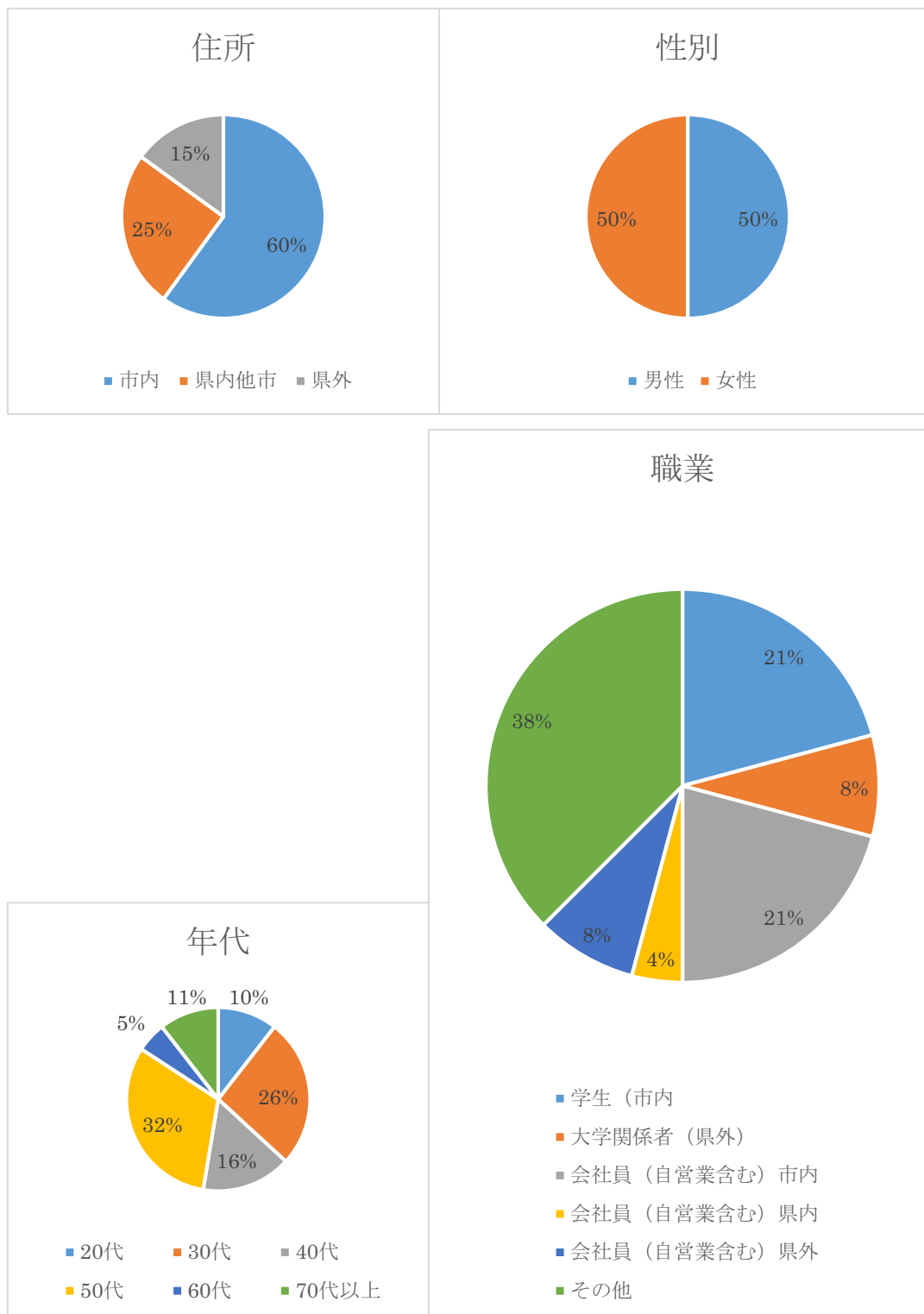


写真2 話し合う参加者

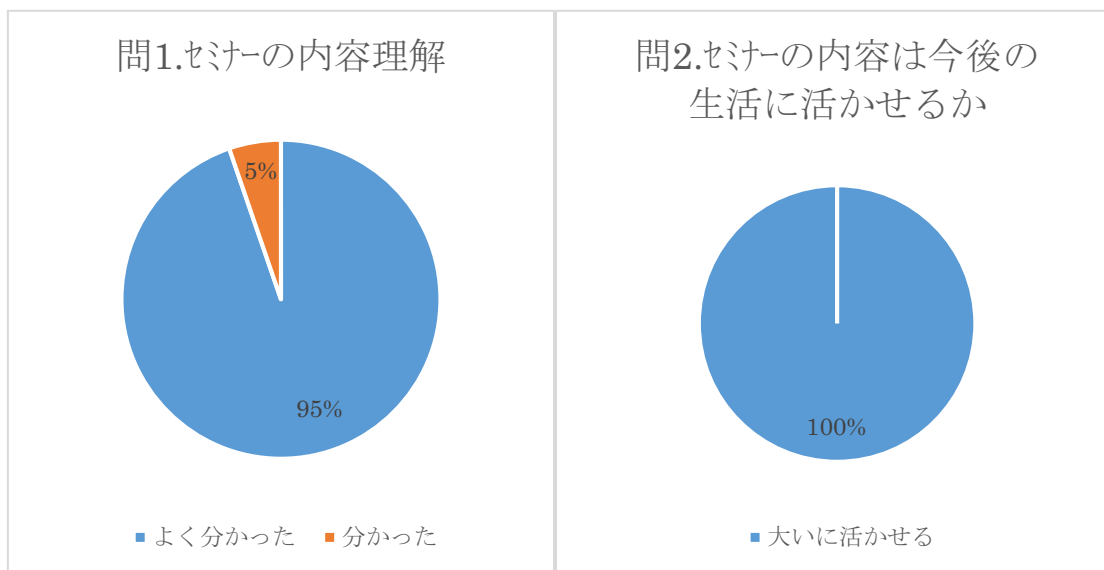
9. アンケート結果

参加者 23 人のうち、アンケート回答者は 20 人、回答率は 87%でした。

(1) 参加者属性



(2) セミナーの内容について



(3) セミナーの内容に関する主な感想、意見

- テーマの選択、講師の話し方が非常におもしろいと思いました。
- とても良かったです。あえていえば、もっと交流の時間があれば良かったです。
- 理系の研究者の考える「まちづくり」がいかなるものか参考になった。理系の研究者はハードを意識する傾向にある。コンペなどでは文理の研究者を揃えるべき。
- 会社の営業部門と製造部門の関係にもコンセンサス会議の考え方は応用できるのではないかと思います。
- とてもおもしろかったです。大変興味あるテーマで、今後何か具体的に活動していきたいです。
- 期待以上に面白かったです。小林先生のお話は何時間でも聴けそうです。
- トランスサイエンスの成り立ちについて大変勉強になりました。
- 小林さんのお話は分かりやすく興味深かったです。将来構想を若年の人も主体的にしていくにはどうしたら良いのか考える良い契機だと思います。

No.5 未来創造セミナー実績報告

1. 開催日時:平成 29 年 10 月 18 日(水) 18 時 30 分から 20 時
2. テーマ: みんなでつくる「まちライブラリー」
講演 みんなでつくる「まちライブラリー」
ワークショップ UDCBKの本棚でまちをつなげよう!
3. 講師及びファシリテーター:
講師:磯井 純充 (まちライブラリー提唱者、森記念財団普及啓発部長、大阪府立大学
観光産業戦略研究所所長補佐・客員研究員)
ファシリテーター:武田史朗(立命館大学工学部教授・UDCBK副センター長)
4. 開催場所:UDCBK
5. スケジュール
18 時 30 分～19 時 20 分 講演 みんなでつくる「まちライブラリー」
19 時 20 分～20 時 00 分 ワークショップ UDCBKの本棚でまちをつなげよう!
6. 参加人数:20 名
7. 報告
(1) 講演 みんなでつくる「まちライブラリー」
まちライブラリー提唱者の磯井氏にまちライブラリー誕生の経緯やまちライブラリーの意味
などをお話いただいたあと、全国各地のまちライブラリーの事例を紹介いただきました。



写真1 講義する磯井先生

- 1987年に赤坂のアーカヒルズ地下4階の20坪でアーカ都市塾を開設、120坪になり、1996年には地上36階450坪の場所でアーカアカデミーヒルズに、そして、2003年には六本木ヒルズの49階に六本木アカデミーヒルズを開設。事業は拡大したが、利用者同士がお互い知り合えなくなった。
- 2010年に運命的な出会いがあり、三つのことを学ぶ
 - 1) 個人のでやれることだけをやる
 - 2) お互いの持てるものを出し合う
 - 3) 無理のない場所と時に小さくやる
- 本を寄贈して、感想を共有し、みんなの感性を共有しあう。「本」を通して、「人」と出会う まちライブラリーのコンセプトを思いつく。
- まずは故郷大阪の実家の空きビルでまちライブラリーをスタート。
- その後、全国各地でいろいろな形態のまちライブラリーが開設
 - カフェ、お寺、歯医者、病院、自然の中、公共図書館など
- 大阪府立大学が難波にサテライトキャンパスを作る際に、まちライブラリーの拠点として蔵書ゼロの図書館を開設
 - 定期的に植本祭(本を寄贈したい人が本を紹介するワークショップを行い、終了後に本を寄贈するイベント)を開催。
 - 2日の植本祭で48のワークショップを同時開催。大きなイベントを行うのではなく、小さなイベントを同時に、高頻度で行う。
 - 1人のスタッフで、年間250回のイベントを開催し、5年で蔵書ゼロが約9700冊、会員数1500人となる。
- 立命館大学大阪いばらきキャンパスでは、地域の人々の交流の場としてまちライブラリーを開設
- もりのみやキューズモールでは、商業施設に地域コミュニティの場を作るためにまちライブラリーを開設
- 大阪府立大学、立命館大学、もりのみやキューズモールいずれも運営団体への親しみを感じる利用者が7割を越えている。
- 千歳タウンプラザは中心市街地の活性化を目指した日本最大のまちライブラリーを開設
- 現在では全国各地に約500か所のまちライブラリーが誕生している。
- グッドデザイン賞2013(公共のためのサービス・システム)などを受賞した。
- まちライブラリーの設置個所や運営主体は想定以上に多岐にわたっている。
- まちライブラリーが目指すもの
 - 減り続ける街の本屋さんになる役割を
 - 運営組織と利用者が双方向の関係に
 - 様々な人が本を通して、出会い発酵する場に

(2) ワークショップ UDCBKの本棚でまちをつなげよう！

引き続き、武田副センター長のファシリテーションにより、「UDCBKの本棚でまちをつなげよう！」をテーマにワークショップを行いました。

ワークショップでは、自己紹介を兼ねて、まずお互いに持ち寄った本の紹介をしました。参加した皆さんは読書家のため、とても興味深く聞いておられたのが印象的でした。

そのあと、UDCBKの本棚を利用したまちを繋げるアイデアを話し合いました。

主な意見は以下の通りです。

- まちの文庫、人と本が出逢える場所
みんなが自分の好きな図書を持ち寄って自主的に管理する小規模な図書館的な活動拠点として運営する。かつての文庫活動は人々のために本を集める活動であったが、現在は本をきっかけに人と人を繋げる文庫活動である。
- まち外ライブラリー
UDCBKは通りに面したガラス張りの場所なので、ビルの中ではなく、まちの外にあるイメージ。そこにいろいろな人が、まちがって入ってきて、普段出会わない本や人と出会うような場所とする。本はそれぞれが好きな本を持ち寄るが、植本市やビブリオバトルなどを定期的に行い、必ず本を紹介する機会を設ける。
- 名づけない空間みなくさ集会所
ここにくれば、様々な人や情報とつながることができる場所として、あえて何も名づけず、偶然その場に居合わせた人たちが、その時々で名づけていく場所として、本棚に置く本も特にテーマは定めない。



写真2 ワークショップの様子

8. まとめ

UDCBKで行われるセミナーの初参加者比率は、通常2～3割程度ですが、「本」をテーマにした今回のセミナーでは20人中19人がUDCBKのセミナー初参加者でした。「まちライブラリー」のコンセプトである「本を通して人と出会う」を実感した出来事でした。

本の魅力は本という共通のメディアに絵や文字で様々なテーマを表現できることです。ワークショップでも「名づけない空間」とありましたが、UDCBKの空間もテーマを限定せず、様々なテーマを取り上げることによって、普段出会わない情報や人が出会うことを目指しています。そこにまちライブラリーというコンテンツを入れることは、本という新たなメディアが加わるだけでなく、定期的な植本市やビブリオバトルなどのイベント開催、まちライブラリーの常設によるスタッフという人が関与等を考えるとUDCBKでまちライブラリーを行う意義は十分あると考えています。

今後は、社会実験事前調査事業等によりUDCBKでまちライブラリーを開設するための条件等について検証していきたいと考えています。

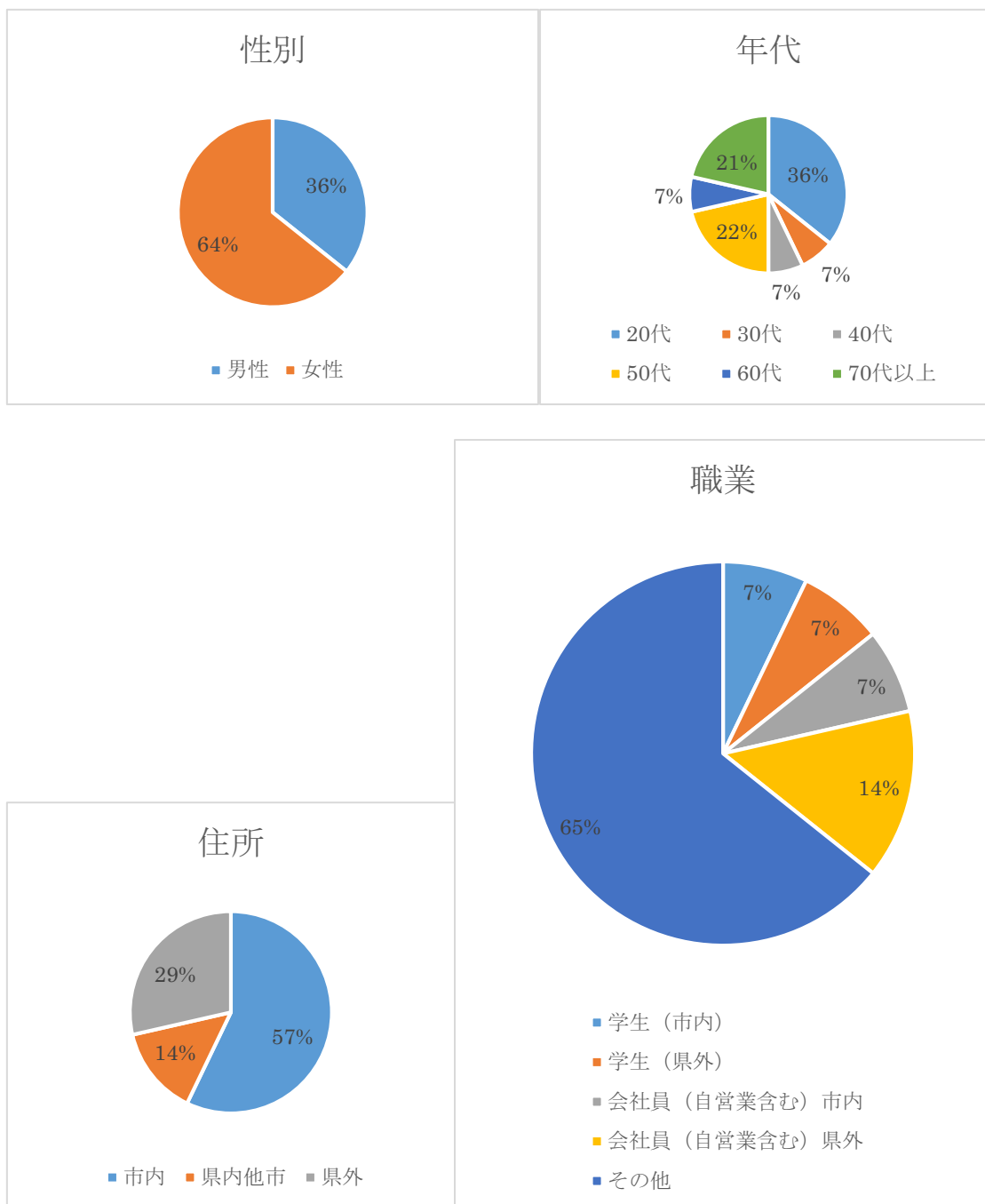


写真3 みんなで記念写真

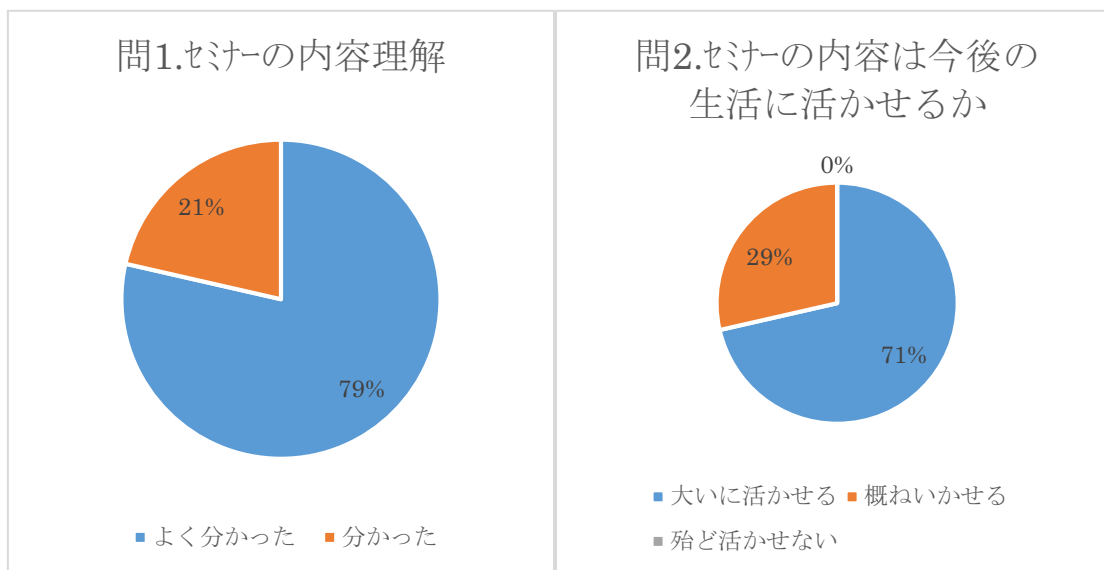
9. アンケート結果

参加者 20 人のうち、アンケート回答者は 14 人、回答率は 70%でした。

(1) 参加者属性



(2) セミナーの内容について



(3) セミナーの内容に関する主な感想、意見

- 小規模の集まりをたくさんに共感です
- 普段話せない人と話す機会があってよかった
- 学外で立場が違う方々とお話する機会は少ないので新鮮で良かったです
- 今回のセミナーで学んだことを自分の研究論文で活用したいとおもいます
- 人のつながりの多様性を感じられました。
- ”まちライブラリー”って結局文庫だなんて思った、公共圏をつくっていく原動力が1970年代、80年代の文庫だった、次々に分館ができて子どもたちでも歩いていける所に公立図書館ができることが夢だったがそれができないままに今名前を変えてこういう動きができているのかなあと思った。

No.6 未来創造セミナー実績報告

1. 開催日時:平成 29 年 12 月 8 日(金) 18 時 30 分から 20 時
2. テーマ:「感じて、ふれて、ベトナム！」フェスタができるまで
～外国からの人々と野路町の人々のハートフルなものがたり～
話題 「感じて、ふれて、ベトナム！」フェスタができるまで
ワークショップ 外国からの人々と地域の人々のつなぎ方
3. 話題提供者:ディン. ティ. ドン. フウンさん(立命館大学理工学部助手)
4. 開催場所:UDCBK
5. スケジュール
18 時 30 分～19 時 00 分 話題 「感じて、ふれて、ベトナム！」フェスタができるまで
19 時 00 分～20 時 00 分 ワークショップ 外国からの人々と地域の人々のつなぎ方
6. 参加人数:25 名
7. 報告
 - (1) 話題 「感じて、ふれて、ベトナム！」フェスタができるまで
ディン. ティ. ドン. フウンさんから、ベトナム・フェスタを開催するまでの野路町の人々や KIFA(草津市国際交流協会)関係者、そしてベトナムの人々との交流をお話いただきました。



写真1 フウンさん(右)と地元の方

- フーンさんはベトナムの大学でITと数学を学んだあと、2006年に立命館大学情報理工学部留学。現在までに世界や日本の各地で生活を体験し、日本では会社員も経験。
- ベトナム・フェスタは、KIFAとの出会い、野路町の人々との出会い、そして、滋賀在住のベトナム人とのつながり、この三つの力が合わさって、実現した。
- KIFAとの出会いは、日本語を学ぶためにKIFAの日本語ひろばに参加。最初は教えてもらうだけであったが、草津の名物料理への感想を聞かれるようになり、さらに災害時に通訳として活躍する機能別消防団に入隊するなど、教えられる立場から、意見を聞かれるようになり、そして、地域のために活動するようになった。
- 野路町との最初は農作業を見学したり、質問したりだったが、徐々に作業を手伝い、色々なことを話し合うようになった。そのうち、地域のお祭りにゲストとして参加するようになり、今では地域のお祭りに出店するようになった。
- 滋賀には日本に長期滞在するベトナム人が短期滞在のベトナム人を支援するベトナムコミュニティがある。現在は50名ほどでサッカーをしたり、懇親会を開いたりしている。
- 農作業やお祭りを通じて野路町の人々と仲良くなるにつれ、ベトナムのことを聞かれるようになったことから、ベトナム・フェスタを開催することを思いついた。
- KIFAに相談すると、イベントのやり方を教えてくれたり、司会をしてくれたり、色々手伝ってくださり、「できるじゃん！」と思った。
- 滋賀ベトナムの仲間たちに相談すると、料理を作ったり、ダンスをしたり、またベトナムから工芸品を仕入れたりと皆ができることをしてくれて、「できるじゃん！」と思った。
- 野路町に相談すると、町内会長のリーダーシップのもと、新宮会館を貸してくれたり、参加者を集めてくれたり、参加費を出してくれたり、「できるじゃん！」と思った。
- KIFA、滋賀ベトナム、野路町、この三つの力がひとつになって、ベトナム・フェスタが実現できた。
- このようにフェスタの準備から多くの人に手伝ってもらい、フェスタ当日の7月9日は179名の方が訪れ、大盛況であった。
- フェスタのあと、野路の友達が、ベトナム語で「シンチャオ」とあいさつしてくれた。
- フェスタでは、リーダーシップの重要性和日本のおじいちゃん、おばあちゃんの行動を通じて日本文化を学んだ。
- またフェスタを通じて、みんなが自分の能力に気づいた。そして、今まであまり知らなかったベトナム人の仲間のことを知れたこと、なによりも活きた日本語を学べたこと。
- わたしたちは地域の日常の活動にもっと参加したい！草津のみなさんにどんどん話しかけるので、よろしく願いしますと締めくくった。

(2) ワークショップ 外国からの人々と地域の人々のつなぎ方

引き続き、「外国からの人々と地域の人々のつなぎ方」をテーマにワークショップを行いました。

ワークショップでは、旅人を受け入れるという宿場町という素地、外国人の関心を惹く農地という空間、そして、フーンさんの誰にでも声をかける物怖じしない明るい人柄、この三つの条件に加え、フェスタ開催を支援する野路町内会やKIFAや滋賀ベトナムという専門集団があったことが成功の要因であることを確認しました。

その他フーンさんが来年度ベトナムに帰国することから、野路町の人がベトナムに農業指導にいく、ベトナムと野路町の小学校交流、共同での商品開発など野路町との国際交流の提案がありました。



写真2 ワークショップの様子

8. まとめ

今回の事例では、フーンさんの役割が当初は日本語を教えられる立場、日本での生活の支援を受ける立場から、日本語の上達と地域の人々との関わりが深くなるにつれて、イベントのお手伝いや日本とは異なる文化を体験した経験からの外国人向けサービス開発のアドバイスを求められるなど助言者、協力者という立場に変化し、今回のフェスタでは主催者と変わっていきました。いわば、ゲストからパートナーを経て、リーダーに成長していったといえます。

そのきっかけは、フーンさんの物怖じしない明るい性格、それに応答する地域の人々がいたことが確かですが、それぞれの段階に応じて、適切な資源を供給するポテンシャルが地域にあったことが挙げられます。初期のゲストの段階では交流に必要な農地ややさしい日本語を教えるKIFA(草津市国際文化協会)の存在がありました。次のパートナーの段階では、セミナー

やワークショップなど助言や意見を求める場の提供があり、リーダーの段階では、フェスタ開催に必要な新宮会館というインフラ、広報活動や会場設営、司会などイベント開催のノウハウを持つ野路町内会やKIFA(草津市国際交流協会)や滋賀ベトナムなど専門集団が地域のネットワークがありました。UDCBKにおいても、「やさしい にほんご さろん」やこの未来創造セミナー「たぶんカフェ」などの場を提供することにより、微力ながら、貢献できると考えています。

このようにUDCBKは、直接の支援はできないため、成果は見えにくいですが、未来のまちづくりに貢献していることを再認識できたセミナーでした。

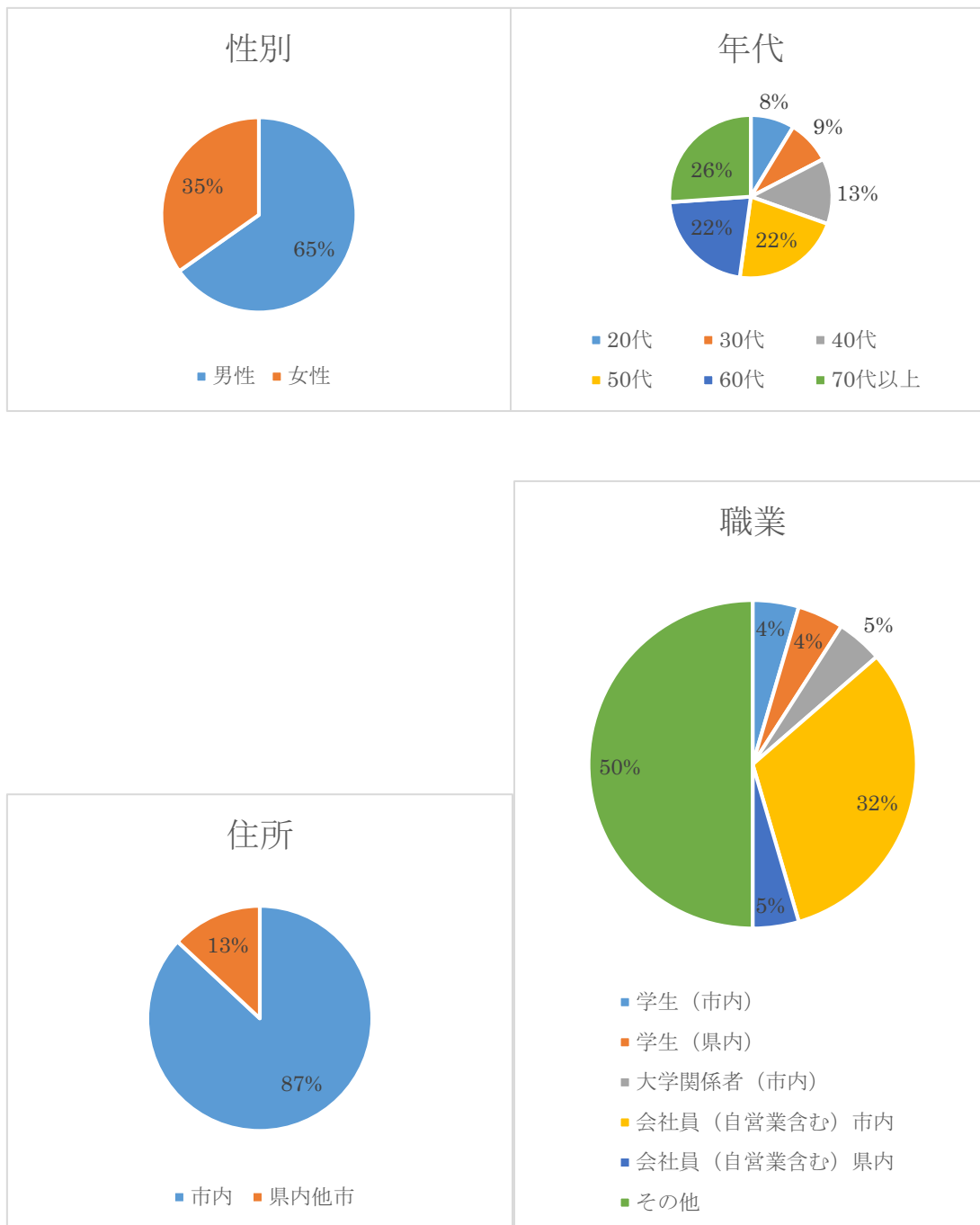


写真3 みんなで記念写真

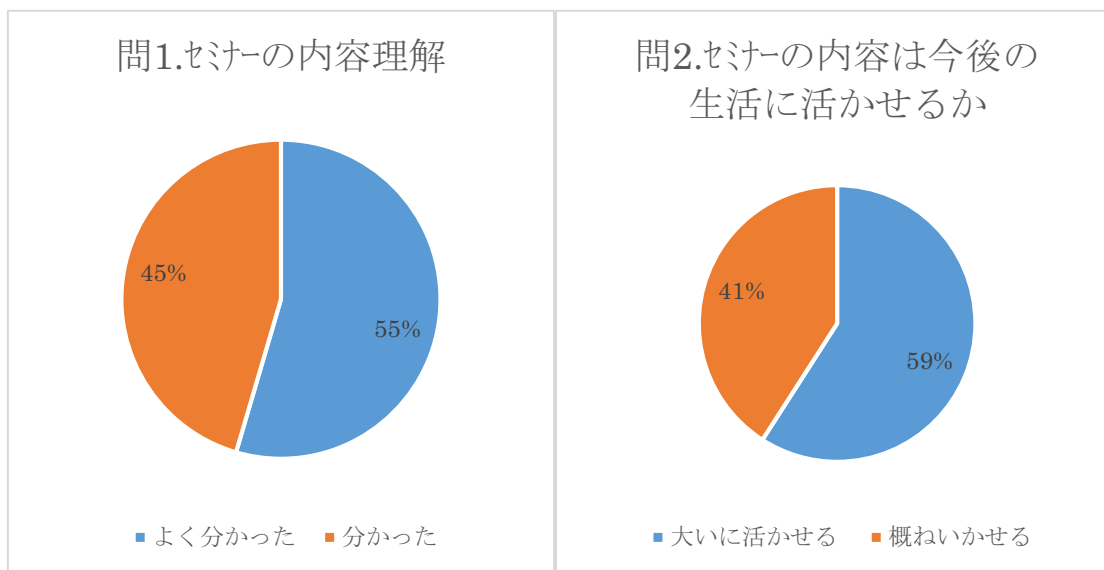
9. アンケート結果

参加 25 人のうち、アンケート回答は 23 人、回答率は 92%でした。

(1) 参加者属性



(2) セミナーの内容について



(3) セミナーの内容に関する主な感想、意見

- とてもいつながりができましたし、H30の目標もきくことができ良かったです。
- 人と人のつながりがあれば無限に可能性がある。
- 野路でのフェスタ開催にかかわれたので、ベトナムの方々の仲間意識、努力に感動している。
- 外国の方々との交流を進めていきたい。
- フェスタに参加してみたい、ベトナムを少し身近に感じられた。
- 素晴らしい機会を設けていただき感謝します。
- 色々な方と話し合えてとても良かったです、外国の方々と自然な感じで話し合えたことが良かった。

No.7 未来創造セミナー実績報告

1. 開催日時:平成 30 年 1 月 6 日(土) 10 時 30 分から 12 時
2. テーマ:「草津に生まれ育ち、そして草津を離れて気づいたこと」
～All For One すべては草津の未来のために～
3. 話題提供者:山元圭太氏(草津市下笠町出身/株式会社 PubliCo 代表取締役 COO)
4. 開催場所:UDCBK
5. スケジュール
10 時 30 分～11 時 15 分
ACT1 話題1 草津に生まれ育ち、そして離れて、気づいたこと
ワーク1 私の頭の中の草津
11 時 15 分～12 時 00 分
ACT2 話題2 データで見る草津の未来予想図
ワーク2 All For One、すべては草津の未来のために
6. 参加人数:44名
7. 報告
 - (1) 話題 1 草津に生まれ育ち、そして離れて、気づいたこと
草津市下笠町出身の山元さんに「草津に生まれ育ち、そして離れて、気づいたこと」と題して、まちづくりの仕事を目指したきっかけや草津市への思いを語っていただきました。
 - サンヤレ踊りで有名な下笠町の生まれ、中学生時代に阪神大震災を経験。
 - 高校はゲームクリエイターを目指し、商業高校に進学。しかし、ゲームクリエイターではなく、ビジネスに関心があることに気づき、大学は商学部。
 - 学生時代に訪問したフィリピンでゴミ山をみて衝撃を受ける。ゴミ山で遊ぶ子どもたち、スカベンジャー。雨がふれば、汚水があふれ、有毒ガスの発生や火災もたびたび。ゴミ山の下に人が亡くなっていることも。
 - このゴミのほとんどが日本の自分たちが作ったり、使ったりしているものだから、このような社会問題を解決する仕事に就きたいと考えた。
 - 国際協力 NPO の活動をみると、可能性は高いが、基本的な経営能力がないため、組織運営や資金調達がうまくいかず、本来の活動ができていないことがわかった。



写真1 講義する山元先生

- 卒業後経営コンサルタント会社に就職。
- 5年後、経営コンサルタントの経験が役立つと考えて国際協力NPOに転職した。
- その後、3.11東日本大震災が起こり、ひとつの団体ではなく、多くの団体を支援することを目的に現在の会社を立ち上げた。
- その後島根県雲南市や奥出雲町、滋賀県の近江八幡市、徳島県神山町、宮城県気仙沼市の地方創生にかかわっている。
- 故郷草津市でもなにか役立つことをしたいと思い、去年の夏頃、UDCBKに伺ったことをきっかけに今回のセミナーを開催することになった。

(2) ワーク1 私の頭の中の草津

参加者のみなさんにグループで「私(たち)の頭の中の草津」をテーマに「(草津で)今起きていること、面白い人・場所・こと、困っている人・こと、やってみたいこと」をグループで話し合っていました。その結果はUDCBKの壁面に張り出し、みていただきました。

(3) 話題2 データで見る草津の未来予想図

山元さんからデータに基づいて、2040年の滋賀県市町村の未来予想図(このままでいくと起こる未来)について、わかりやすく説明いただいた。

- 22年後(2040年)の滋賀県の少子高齢化の状況を全国と比較。
 - ①総人口は全国ほどではないけど減ります。
 - ②少子化は全国並に進みます。
 - ③高齢化は全国以上に急激に進みます。
- 滋賀県各市町村の22年後(2040年)の少子高齢化社会の未来予想図を2015年

と比較して、堅調型(変化なし)-1 市町村、鎮静型(人口減少、少子高齢化が沈静化)-4 市町村、高齢強化型(人口変わらず、高齢化が進む)-6 市町村、少子強化型(人口変わらず、少子化が進む)-7 市町村、激化型(人口減少、少子高齢化が進む)-1 市町村(詳細は当日配布資料参照)の5つのタイプに分類

- 草津市は5つのタイプのうち、高齢強化型にあたる。
- 高齢強化型の処方せんとして、リカレント教育や幼老複合施設などを示した。
- また草津市をデータに基づき4つの地域に分け、それぞれの特徴を示した(詳細は当日配布資料参照)
- 最後に草津市の今後の取り組みの参考として地域おもろい化拠点「浜街道 BASE」のアイデアを示していただいた。

8. まとめ

今回は定性的主観的な視点(右脳)で草津市のイメージや思いを参加者にあげていただいたあと、山元氏がデータに基づいて草津市を定量的客観的(左脳)に分析していただきました。草津市は住みよさランキングでは、5年連続近畿地区一位ですが、市内の各地域をデータで見れば、草津駅、南草津駅周辺だけであり、必ずしも市内全域に当てはまらないこと、22年後をみると転入者が40代50代ということもあり、急速に高齢化がすすむことを可視化していただきました。

UDCBKにおいて、未来のまちづくりを今後検討していくうえで、データに基づくシミュレーションは不可欠であることを改めて認識しました。

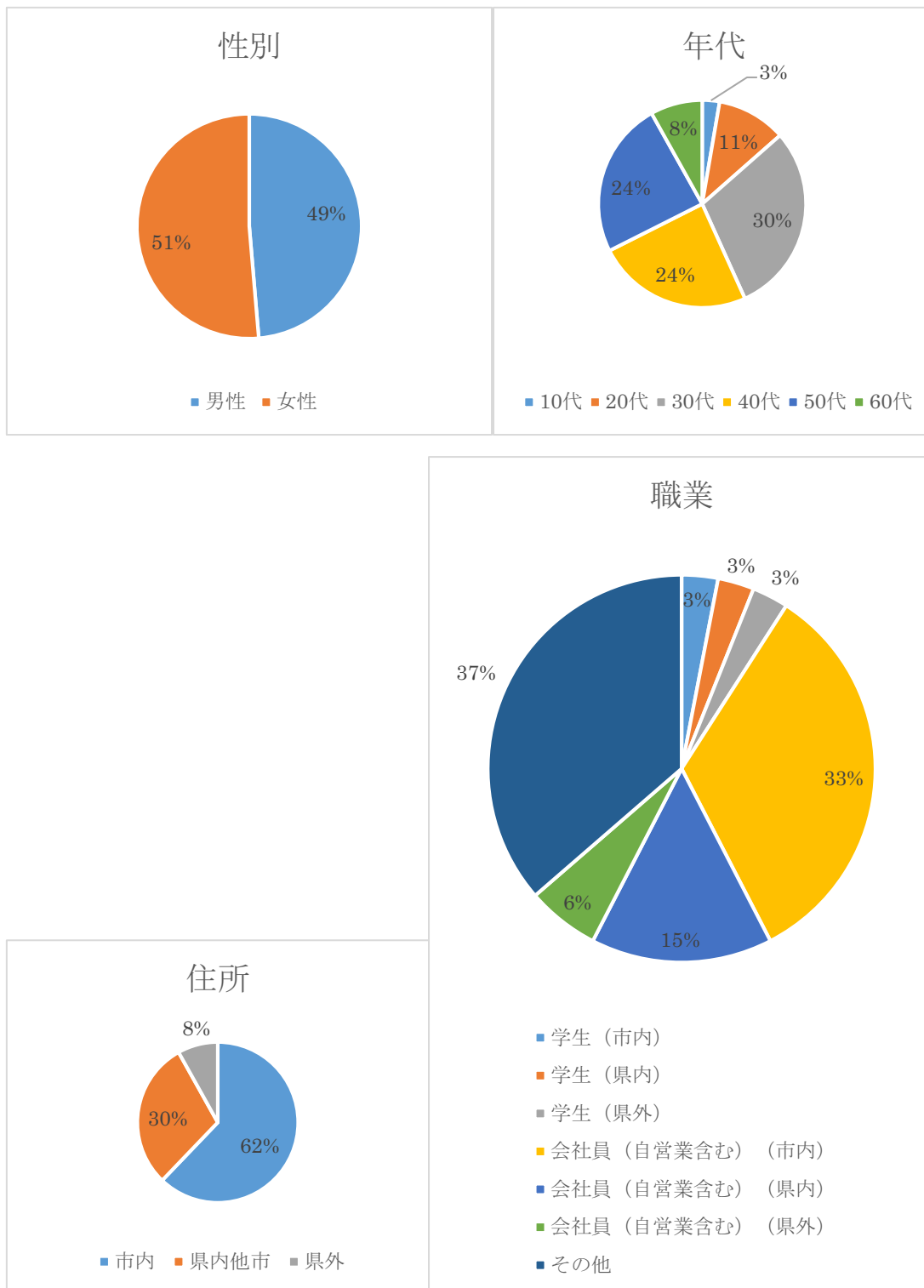


写真2 みんなで記念写真

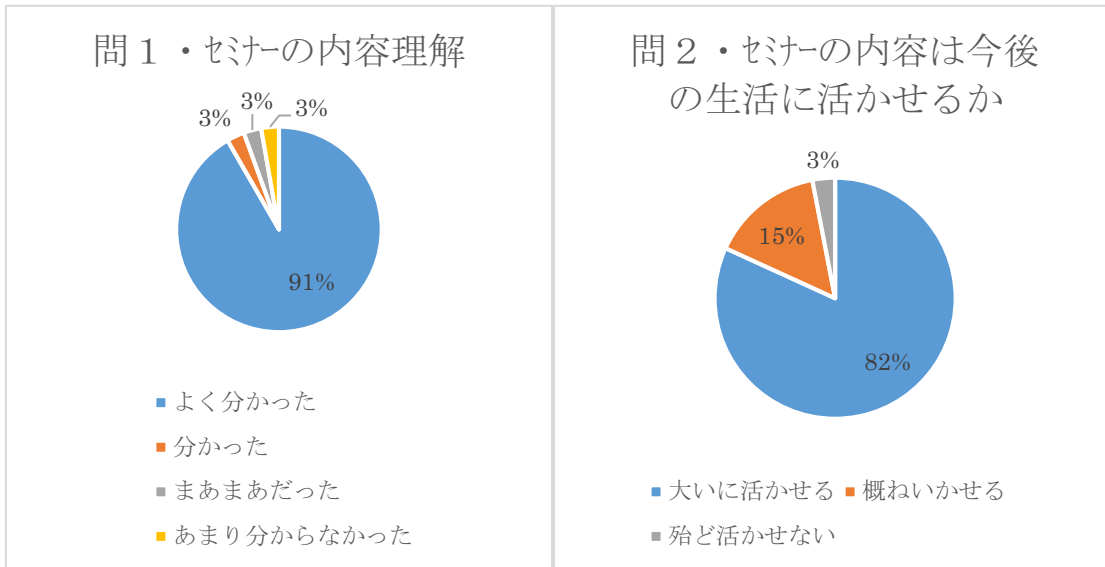
9. アンケート結果

参加者 44 人のうち、アンケート回答者は 37 人、回答率は84%でした。

(1) 参加者属性



(2) セミナーの内容について



(3) セミナーの内容に関する主な感想、意見

- とてもよかったし、知識だけじゃなくて実際行動を起こしている人の言葉は人を動かす力があります。
- 22年後の私たちの町がヤバイことにショックをうけた、あと私たち日本人は、支援者だけでなく加害者であるという事実にも、目をそむけてはいけないと思いました。
- 草津についてよく知ることができた。
- 短い時間でしたが、コンパクトにわかりやすくお話いただきました、草津のことを考えるよい機会になりました。
- 非常におもしろくグループ内でフランクにディスカッションできて良かった。
- にぎやかで良かったと思います、グループディスカッションがあつて良かったです。
- 来てよかった！！未来を選び未来に関わり未来を創るという言葉にわくわくした。
- テーベースのお話で大変楽しく学べました。
- テーベを示しての説明がすごく分かりやすく、説得力があり良かった。
- 改めて草津について考え、知ることができてとても有意義な時間でした。
- これからの医療費や高齢化を思うと自分のことをできなくなるけれど、まだ健康である30～40代についてもっともっと考えていきたい。

シリーズ 地域で語り継がれる港の物語り
～湖上交通が盛んだったころの記憶・思い出～
(No.8～10 平成 29 年度未来創造セミナー)

1. 背景と目的

草津の津は港という意味です。

草津の歴史をみると、湖岸の常盤、山田、老上西にはいくつかの港があり、白鳳時代から昭和 40 年代まで湖上交通の拠点として大津や坂本と草津を結んでいました。

この三つの地域が湖上交通の最も栄えた時代は異なります。

常盤にある志那港は飛鳥から平安時代にかけて対岸の大津京や比叡山との関係で栄え、昭和初期には穴村のもんやさんに訪れる人で穴村港が賑わいました。

老上西にある矢橋港は江戸時代に東から都に向かう港として、また「急がば回れ」の語源の地として栄えました。

そして、山田にある山田港は明治から昭和 40 年頃まで汽船が就航し、人々の大切な交通手段でした。

鉄道や自動車の発達により、残念ながら、湖上交通はほとんどなくなってしまいましたが、このように草津は湖上交通の要衝でした。

本セミナーでは、それぞれの地域に住む方から、地域で語り継がれてきた湖上交通に関連する民話などの記憶や個々の思い出、あるいは地元への思いをお話いただき、草津宿街道交流館の学芸員より、それぞれの地域の湖上交通の歴史について解説していただきます。そのあと、参加者のみなさんと草津の未来について語り合います。

UDCBK は、みんなで草津の未来のまちづくりについて語り合う場です。草津の未来を語り合うには、教科書に載るような歴史だけではなく、地域で語り継がれてきた昔の人々の暮らしを知ること、そして、それを現在まで大切に語り継ぐ地域の人々がおり、その人々の地域への思いを知ることが未来のまちづくりを考えるうえで、とても重要と考えていることから、本シリーズを開催することとしました。

2. 各回の構成

- 3 部構成各 90 分とする。
- 第 1 部は「語り継がれる地域の記憶」とし、それぞれの地域の人による港に関係する民話の紹介や研究成果や思い出を語っていただきます。
- 第 2 部は「それぞれの地域の湖上交通史」として草津市草津宿街道交流館学芸員によるそれぞれの地域の湖上交通の歴史について解説します。
- 第 3 部は「ワークショップ 未来に向けて出航！」と題して、第 1 部、第 2 部を参考に参加者間で対話を行います。

3. 各回の内容とスケジュール

	1	2	3
日時	平成 30 年 1 月 20 日(土) 14:00~15:30	平成 30 年 2 月 3 日(土) 14:00~15:30	平成 30 年 2 月 24 日(土) 14:00~15:30
地域	常盤	老上西	山田
第 1 部	常盤に語り継がれる港の話 (常盤の民話集より) 読書グループ松葉会	「急がば回れ！」の語源の地 矢橋の渡しへの思い 辻浦岩水氏	ブラサダオ 昔、琵琶湖は道路だった?! 竹川貞雄氏
第 2 部	常盤の湖上交通史 一港・湖上交通から見た「常 盤」って？ー 草津宿街道交流館学芸員 富田 由布子	老上西の湖上交通 草津宿街道交流館学芸員 岩間 一水	山田港の歴史 草津宿街道交流館学芸員 岡田 裕美
第 3 部	ワークショップ	ワークショップ	ワークショップ

4. 各回まとめ

(1)第1回 常盤 (No.8 平成29年度未来創造セミナー)

1) 開催日時:平成30年1月20日(土) 14時から15時30分

2) テーマ:

第1部 常盤に語り継がれる港の話(常盤の民話集より)

第2部 常盤の湖上交通史 一港・湖上交通から見た「常盤」って？

3) 話題提供者:

第1部 読書グループ 松葉会のみなさん

第2部 富田由布子氏(草津市立草津宿街道交流館学芸員)

4) スケジュール

14時～14時30分 第1部 常盤に語り継がれる港の話(常盤の民話集より)

14時30分～15時00分

第2部 常盤の湖上交通史 一港・湖上交通から見た「常盤」って？

15時～15時30分 第3部 ワークショップ

5) 参加人数:24名

6) 報告

① 常盤に語り継がれる港の話(常盤の民話集より) 読書グループ松葉会

● 読書グループ松葉会について

- 読書グループ松葉会は常盤の子どもたちの良き相談相手になること、本を読ませることを目的に活動を始めた。
- 各家庭にある本を持ち寄ったり、志那中港から紺屋関の古本屋さんに買いに行ったり、県立図書館から借りたりしていた。
- 移動図書館が来たり、公民館の蔵書が増えるにつれ、子ども達に本を読ませる運動から、うずもれつつある地域の民話や伝説を掘り出し、小冊子に纏め、紙芝居を作って子どもたちに語り伝える活動をしている。
- 今回は常盤の港がテーマということで、その中の「穴村港と馬車」をお聞きかせする。

● 紙芝居「穴村港と馬車」

- 昭和の初め、志那中の浜を穴村港と言っていたころ、穴村にはもんやさんという熱くない墨灸を施術する医院があり、色々なところから、船で穴村港につき、五台の馬車が港ともんやさんの間を何度も往復していました。
- 穴村港に入る船はポプラの木を目印にしていたそうです。
- 港から医院まで2キロあり、馬車や人力車に乗ったり、乳母車を借りたり、徒歩で行ったそうです。
- 大正11年には年間で93,000人が訪れました。
- 地元の人たちも田舟を使い、肥料や牛を運んでいました。
- 医院の近くには扇形に広がった竹の串にお団子をさした草木だんごがあるなど大変賑

わっていました。

- 港と医院までにはいちご畑があったり、たんぼぼが咲いていたり、とても楽しい行程でした。



写真1 紙芝居を読む松葉会のみなさん

- 聞き取りを通じて
 - この「穴村港と馬車」の紙芝居を作るにあたり、いろいろな人に当時の話をお聞きした。
 - 穴村には旅館もあり、タカラジェンヌも宿泊した話や、汽船だけではなく、日常の移動にも田舟が使われていたことなど話していただいた。

② 常盤の湖上交通史ー港・湖上交通から見た「常盤」って？ー

草津市立草津宿街道交流館学芸員 富田 由布子



写真2 講義する富田学芸員

- 読書グループ松葉会さんにお話しいただいた「穴村港と馬車」の頃の穴村港の写真をもとに解説。
- 「穴村」は新羅王子の天日槍(あめのひぼこ)が一時身を潜めた場所と言われており、医院

の近くには天日槍(あめのひぼこ)を祀る安羅(やすら)神社がある。

- 常盤は白鳳時代、渡来人との結びつきがあり、多くの寺院がある。
- 中世には対岸の比叡山延暦寺のある坂本―志那―守山を結ぶルートがあり、芦浦観音寺は琵琶湖上で使われる船舶を管理する「船奉行」として湖上を支配。
- 近世(1677年)には55艘の船を有していた。
- 近代には穴村航路が就航。ローカル航路で貨物が相当多かった。
- 穴村にはもんやさんがあり、墨灸に通う子ども連れの女性客が多く、京阪電車との連絡券があった。
- 昔の常盤は琵琶湖を通じて他の地域と繋がり、湖を渡って来た人たちでにぎわう地域であった。

③ ワークショップ

「常盤のキャッチコピーを考える」がテーマであったが、昭和43年まで定期航路が就航していたこともあり、当時の話で盛り上がりました。当時は大津や守山に行くにも船の方が便利だったそうです。また穴村のもんやさんの治療費は心づけであったなど新たな発見もありました。



写真3 ワークショップの様子

7) まとめ

従来のUDCBKのセミナーに来られる方以外にも歴史好きの方、琵琶湖汽船の好きな方などいろいろな人に参加いただきました。またUDCBKのセミナーは、どちらかというと成人してから草津に移り住んできた方が多い傾向がありましたが、今回は草津に生まれ育った方が多く

参加していただきました。草津に生まれ育った方は昔を懐かしみ、草津に移り住んできた方はほんの 50 年近く前まで湖上交通が盛んだっころの草津を知り、未来の可能性を感じられることができたと考えています。

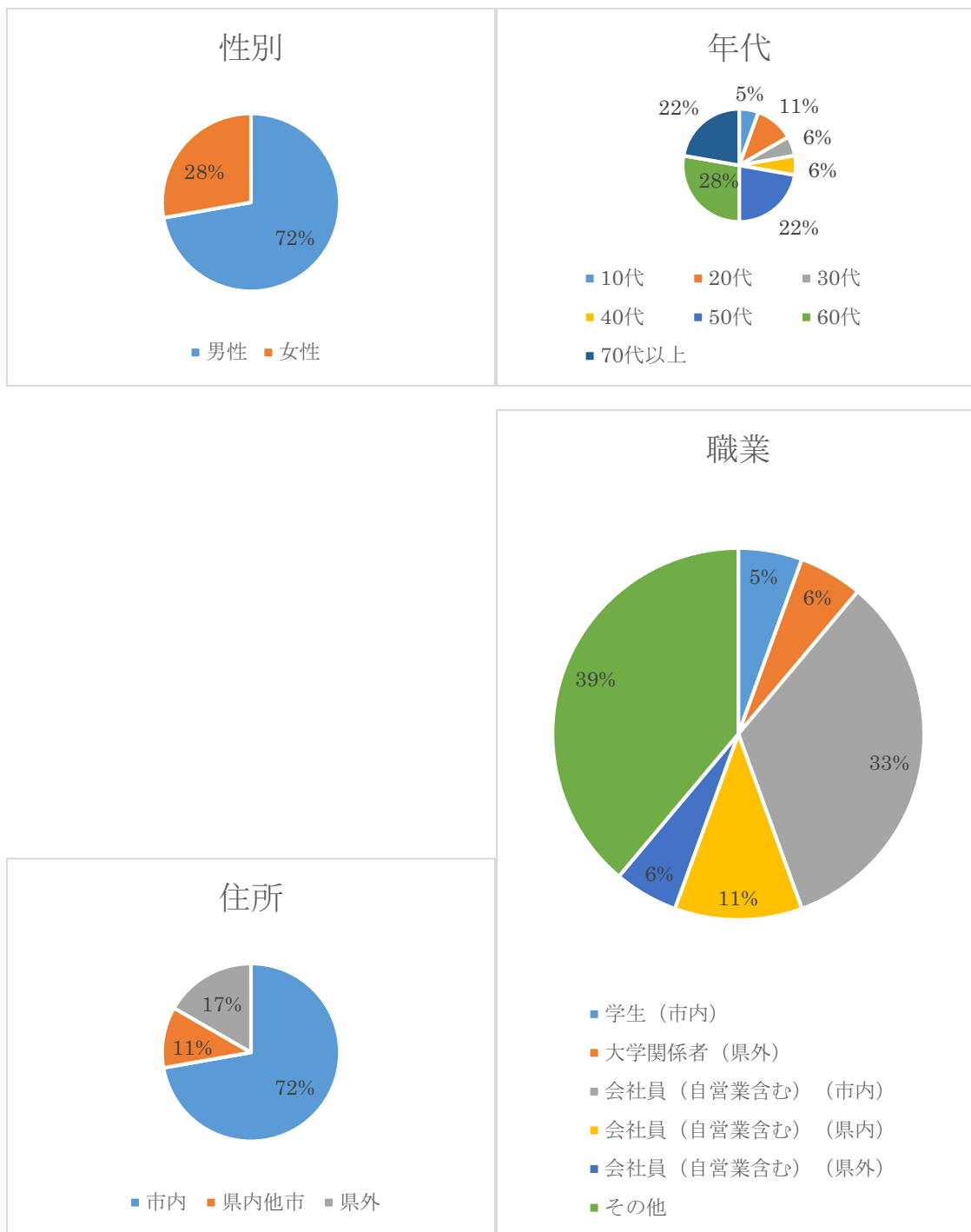


写真4 みんなで記念写真

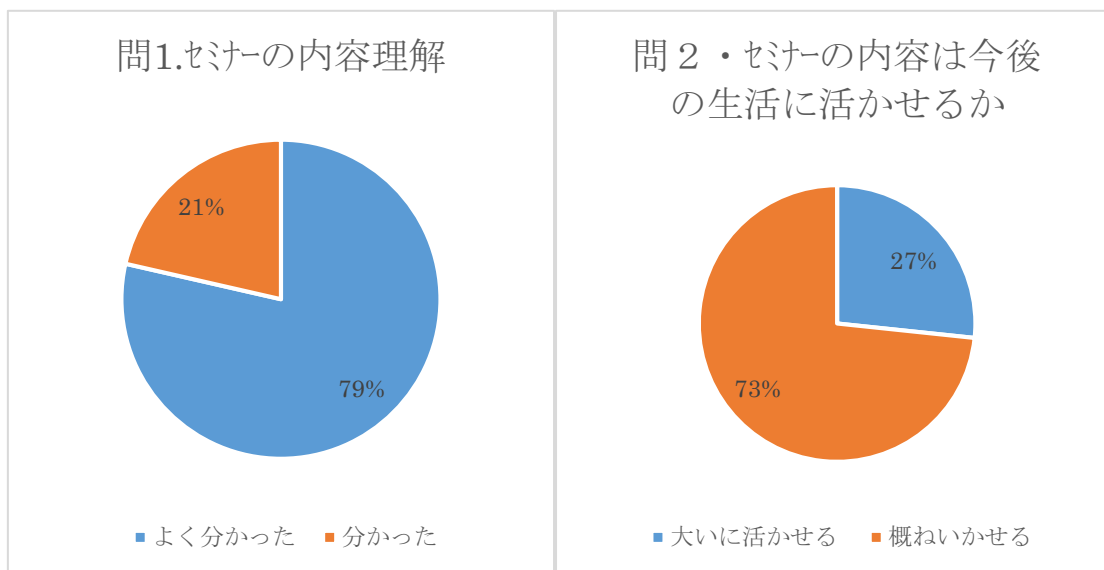
8) アンケートのまとめ

参加者 24 人のうち、アンケート回答者は 18 人、回答率は 75%でした。

① 参加者属性



② セミナーの内容について



③ セミナーの内容に関する主な感想、意見

- 昔なつかしい話をきいて、なごやかな気持ちになれた。もんもんを知ってましたが、うけたことはありません。
- 今は陸地になっている部分が昔は船が通っていたとは想像が付きませんが、話をお聞きして栄えていた時期があったこと、当時のお灸が未だに引き継がれているとの事、現代15代目であること、草木だんごもまだお店があるとのことだったので、行ってみたいと思いました。地元の方々が語り継いでおられる事にも感激しました。
- 学芸員さんの話が分かりやすかったです、草津のことが知れて良かった。
- 自分が知らないことがたくさんしれたことで、とても勉強になったし、自分の市がもっと好きになったので、とてもうれしかったです、また機会があればきたいと思いました。
- 学芸員さんがご紹介になった穴村港の「痕跡」はブラタモリに出れると思いました。
- ワークショップも発表も、よい雰囲気でした、分かりやすい内容だったので、話合いも盛り上がったと思う。
- それぞれの方々(異なる地域)から意見が聞けてよかった。

(2)第2回 老上西 (No.9 平成 29 年度未来創造セミナー)

1) 開催日時:平成 30 年 2 月 3 日(土) 14 時から 16 時 00 分

2) テーマ:

第1部 「急がば回れ！」の語源の地矢橋の渡しへの思い

第2部 老上西の湖上交通

3) 話題提供者:

第1部 辻浦岩水氏

第2部 岩間一水氏(草津市立草津宿街道交流館学芸員)

4) スケジュール

14時～14時 50 分 第1部 「急がば回れ！」の語源の地矢橋の渡しへの思い

14時 50 分～15時 30 分

第2部 常盤の湖上交通史 一港・湖上交通から見た「常盤」って？

15時30 分～16時 00 分 第3部 ワークショップ

5) 参加人数:29名

7) 報告

① 第1部 「急がば回れ！」の語源の地矢橋の渡しへの思い 辻浦岩水氏



写真1 辻浦氏の御講演の様子

- 「武士の やばせの舟は はやくとも 急がば回れ 瀬田の唐橋」
 - 「この歌が流行したため、矢橋の渡しの利用者が減ったのではないか？」という仮説のもと、①和歌を詠んだのは誰か、②矢橋航路は本当に危険だったのか、③危険な場合、どんな安全対策を取ったか、④矢橋浦の人が客寄せに躍起になっていったのは何時なのか、和歌が詠まれた時代と重なっていないか、⑤矢橋浦が衰退する理由は他

になかったか、について考察したことを発表いただいた。

- 氏の和歌の風評被害で矢橋の渡しの客足が遠のいたという仮説を検証した結果を報告いただいた。
 - 歌を詠んだとされる人は源俊頼と宗長がいるが、ここでは宗長説をとる。詠まれた年代は室町時代(1500年頃)との記載が1628年成立の醒醉笑に宗長作との記載あり。
 - 歌の意味は、「急ぐ仕事は、かえって着実に丁寧にせよ」との教えと解釈されている。従って、必ずしも矢橋の渡しが危険であることを歌ったとは言えない。
 - 記録に残っている海難事故は少ないが、季節によっては比良八荒という局地強風が吹く季節があり、休航が多かった可能性は否定できない。
 - 人為的な遭難事故もあり、その際は取り調べのため、数日足止めにあうことがあった。
 - ◇ 使用していた丸子舟は真水、遠浅の琵琶湖にあわせ、丸底と喫水が極めて低い
ため、転覆しやすいと考えられる。
 - 安全対策としては定員の制限の他には見当たらず、これも役所の指導である。
 - 矢橋の渡しに関する和歌は他にも詠まれており、すべて「急がば回れ」と同意である。
 - ◇ 行く年の 瀬田を回るや 金飛脚
 - ◇ こがらしや 寝あく矢橋の 渡し舟
 - ◇ 八月や 矢橋に渡る 人とめん
 - 記録に残る矢橋浦人が行ったことは次の3つであるが、利用者の利便性向上など現在でいうマーケティング的な対応はしていなかったように思われる。
 - ◇ 矢倉の道しるべを建て直す
 - ◇ 常夜灯の建て替え
 - ◇ 新浜邑への抜け渡し禁止
 - 明治期には「近江八景矢橋の帰帆」の絵葉書も発行されているが、場所は天津石場であり、発行者は不明である。
 - 大正時代には「冥途の飛脚」の梅川終焉の地として矢橋をPRするなどの動きがあった。
- 矢橋浦の人々が客寄せに躍起になった時期を日本史年表にあてはめると、衰退の最大の原因は大飢饉と儉約令のために旅人の絶対数が減ったためである。
- 仮説の検証の結果、矢橋浦の人は歌の風評被害に苦しみ、その風評を晴らそうと種々努力していたわけではなかったと結論した。

② 老上西の湖上交通

草津市立草津宿街道交流館学芸員 岩間 一水

- 奈良時代の琵琶湖水運
 - 奈良時代は琵琶湖に八十の港があると言われていた。
 - 琵琶湖水運は藤原京・東大寺・石山寺造営のために甲賀山・伊賀山・高島山からの木材輸送に利用された。

- 木材は琵琶湖から瀬田川・宇治川・木津川を經由して奈良に運ばれた。
- 平安時代の琵琶湖水運
 - 「延喜式」(927年)により、北国から若狭や敦賀などの北陸の港で陸揚げされた租庸調の物資が陸路を経て湖北の港(塩津、勝野津など)から琵琶湖水運を使い大津まで運ばれた。
 - 尾張や美濃の東大寺の荘園からの物資は湖東の朝妻の港から琵琶湖水運を使い、大津まで運ばれた。
 - 平安京の外港を大津が担い、矢橋が交易の場として賑わっていたと「今昔物語」に記されている。
- 鎌倉・室町時代の琵琶湖水運
 - 北国からの年貢が増え、湖上輸送が増加した。
 - 比叡山延暦寺の外港として坂本が台頭、対岸の志那港や山田とも結ばれた。
 - 東国武士の台頭により、軍事上の経路として、京都から坂本、そして矢橋、山田、志那など東西を結ぶルートも利用されるようになった。
 - この時代に連歌師宗長もたびたび通行し、「急がば廻れ…」の歌を詠んだ。
 - 戦国時代には信長、秀吉が琵琶湖水運を掌握、常盤にある芦浦観音寺が船奉行を務めた。
- 江戸時代の琵琶湖水運
 - 北前船による北国の物資が増え、湖北四カ浦(塩津・大浦・海津・今津)が発展
 - 江戸幕府となり、彦根三港(長浜、米原、彦根)が東国物資の拠点となる。
 - 寛文年間(17世紀半ば)に西廻り航路が整備され、琵琶湖経由の物資が減少する一方、街道交通が整備され、志那・山田が衰退し矢橋が台頭する。
 - ◇ 「他国の人は甚だ湖上の渡船を恐れ乗船することを忌む人もありとかや。然れども湖上危うきことは稀なり。偏に風による。」「近江輿地志略」(1733)
- 矢橋の渡し船について
 - 草津―大津の陸路と草津―矢橋―大津の湖上を比較すると時間はほぼ同じだが、歩く距離と費用は矢橋の渡しを利用した方が有利であることがわかる。
 - ◇ 陸路は約3時間、矢橋の渡し利用は約2時間半だが、待ち時間や欠航による足止め費用など不確定要素が多い。
 - ◇ 「急がば回れ」の歌の作者は源俊頼説と宗長説のふたつがある。
 - ◇ 新選組の伊藤甲子太郎も矢橋の渡しをよく利用しており、歌を残している。
- 明治から昭和の琵琶湖水運
 - 明治となり、琵琶湖に蒸気船が就航
 - 明治5年には山田―大津に定期航路が開かれる。
 - ◇ 山田―草津間は矢橋―草津間より少し近い。
 - ◇ 同8年には蒸気船が就航し、矢橋航路は山田航路に乗客を奪われる。

- 琵琶湖に鉄道連絡船が就航
 - ◇ 矢橋航路が消滅し、山田・志那航路は存続する。
 - ◇ 明治 22 年には鉄道が開通し、山田航路の需要も激減していく。



写真 2 学芸員による解説

③ ワークショップ

辻浦氏のミステリー仕立ての話を受け、「なぜ矢橋の渡しが衰退したのか?」、その原因が大飢饉だとすれば、なぜ矢橋だけだったのか、いろいろな推理を語り合うなど盛り上がっていました。参加したみなさん「急がば回れ」の語源の地であることをもっとアピールする必要があると一致した意見がでました。湖岸には当時の石垣の跡があるなど、活用できる資源もあることから、活用を検討していきたいとの意見がありました。



写真3 ワークショップの様子

7) まとめ

辻浦氏の矢橋の渡しが衰退した原因は「急がば回れ」の歌による風評被害であり、その汚名を晴らすとともに、この風評被害をはねのけるために矢橋浦の人々が行ってきた努力の跡を紹介したいという矢橋への思い溢れるプレゼンテーションでした。辻浦さんの資料に裏付けられた推理では、残念ながら、風評被害とまでは言えないということでした。また矢橋浦の人も現在の感覚でみると、お客を増やすための営業努力をしたとは言えないということでしたが、結論はどうあれ、参加者のみなさんは辻浦氏の矢橋への思いを感じ取っていただけたのではないかと考えます。

さらに後半のワークショップでは、辻浦氏の推理を巡り、さらなる疑問が湧きおこり、各々の推理を考えるなど通常の歴史講座にはない展開が見られました。また自分が当時の矢橋浦の人であったら、どんな客寄せのための対策を考えるかを話し合うことにより、未来のまちづくりに活かせるような活動のヒントを得ることができたのではないかと考えます。



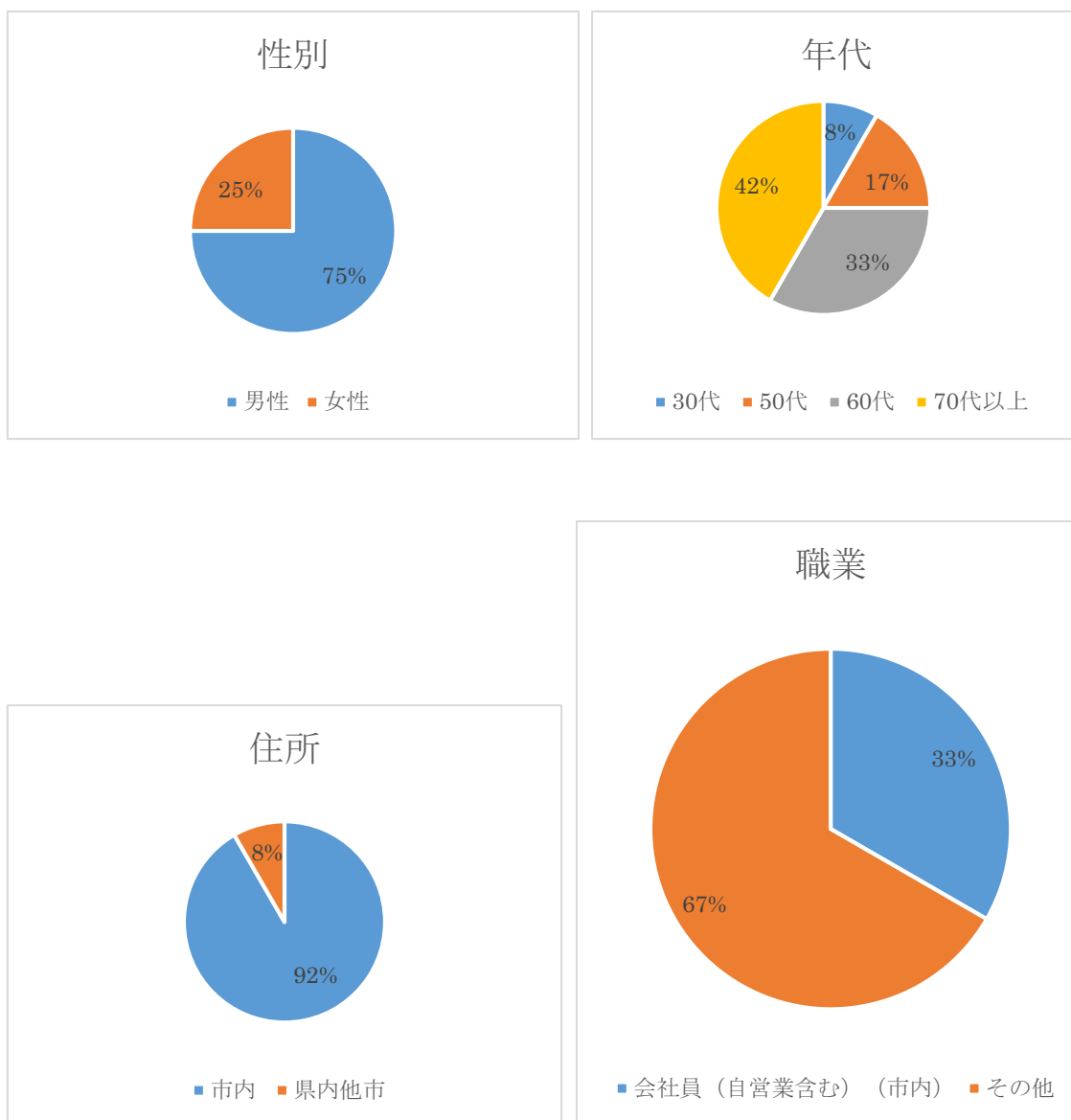
写真4 有志の方の記念写真

8) アンケートのまとめ

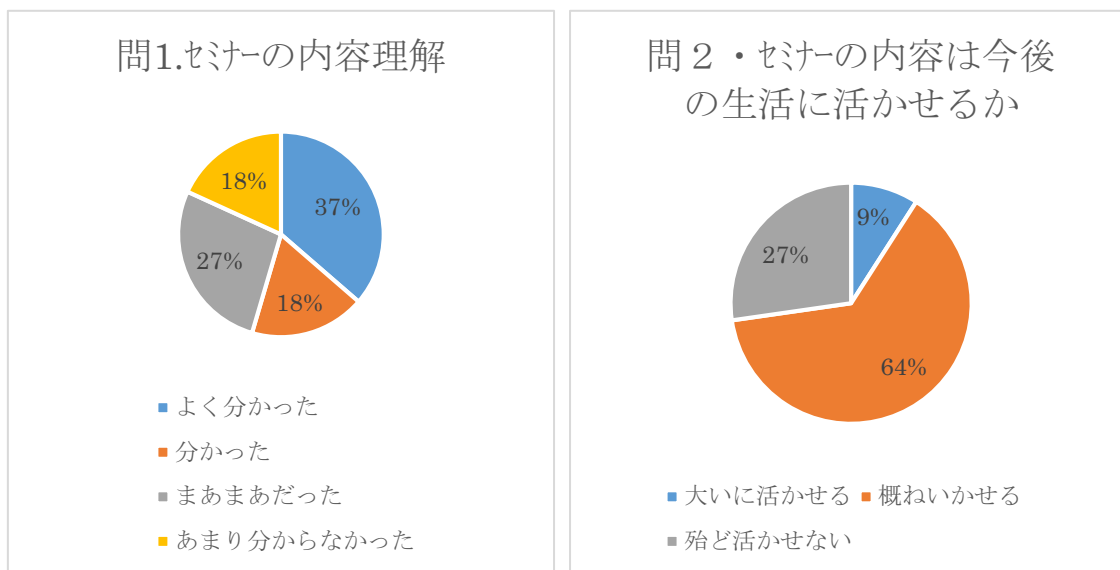
参加者 29 人のうち、アンケート回答者は 12 人、回答率は 41%でした。

*この回は前半の話題提供と解説が長引き、ワークショップ開始時間が遅れたため、最後まで参加する方が少なかった影響を受け、アンケート回答率が低くなりました。

① 参加者属性



② セミナーの内容について



③ セミナーの内容に関する主な感想、意見

- いくつか「初めて知ったこと」があり、勉強になりました。また熱心に研究されてる方もおられ、うれしく思いました。

(3)第3回 山田 (No.10 平成29年度未来創造セミナー)

1) 開催日時:平成30年2月24日(土) 14時から15時30分

2) テーマ:

第1部 大津と山田を結ぶ定期船の思い出

第2部 山田港の歴史

3) 話題提供者:

第1部 竹川貞雄氏

第2部 岡田裕美氏(草津市立草津宿街道交流館学芸員)

4) スケジュール

14時～14時50分 大津と山田を結ぶ定期船の思い出

14時50分～15時15分

第2部 山田港の歴史

15時15分～15時45分

第3部 ワークショップ

5) 参加人数:42名

7) 報告

① 第1部 大津と山田を結ぶ定期船の思い出 竹川貞雄氏



写真1 竹川氏の御講演の様子

- 現在の琵琶湖から山田港の船着き場までの道を竹川氏と一緒に歩く設定で、山田一大津航路があった頃の街のにぎわい、お母さんとの思い出、蒸気船の様子などを楽しくお話しいただきました。
- 竹川氏が語る蒸気船の思い出は、御自身が小学生の頃なので、昭和10年代のこと。
- その当時から街並みは随分と変わりましたが、現在の写真にイラストを描きこむなどいろいろな工夫をしていただいていた語っていただきました。

- 琵琶湖から山田港の入口はヨシが群生していてわかりにくいので、白い棒が立っていて、それを目印に入港したそうです。
- 山田港は狭いため、船の方向転換は杭に船の一点を固定し、スクリューを回して旋回させるなどの工夫していたこと、戦時中では出征兵士の見送りがあったことなど話されました。
- お母さんは野洲の方のご出身で、当時は道も悪く、今でも車で 20～30 分足らずのところでも、山田港から浜大津まで船でいき、浜大津から船で野洲浦まで行かれたそうです。
- 浜大津から野洲浦行の蒸気船は山田一大津航路の船より大きく、機関室で蒸気機関が動く様子を見にいったことをイラストで説明いただきました。
- 竹川氏は子どものころ、身体が少し弱い時期もあり、お母さんと南郷立木観音までお参りに行かれたそうです。立木観音にも船を乗り継いでいくなど当時は湖上交通が生活交通の中心だったようです。
- 船の乗り継ぐ浜大津港には当時の最新鋭の観光船が停泊していたそうです。観光船のポスターには当時としては画期的な水着姿の女性がのっており、幼い竹川氏はドキドキしたことなどお話しいただきました。
- 子どもの頃、夏には港にある田舟を(勝手に)借りて、ロープを定期船に結び付け、沖合まで運んでいってもらったそうです。農作業は午前中に終わり、大人たちはお昼寝をしていたそうです。当時はまだ大らかな時間で、船員も見逃してくれていたそうです。沖合には港の場所を示す白い棒があり、それを水泳をする際の目印にもしていたそうです。
- 山田港の街道筋には30軒近くの商店や旅館、郵便局、銀行などが建ち並んでいてとても賑わっていたそうです。三日月楼さんの建物は今でも残っており、三ヶ月の印がついています。
- 山田港、そして山田の発展には杉江善右衛門さんの尽力があつてこそです。そして、もう一人、杉江長左エ門さんという方も貢献されていました。
- 山田港は琵琶湖の水位の低下により、移動したこと、実は2回ではなく、3回目もあったように記憶しているが、その時は蒸気船ではなく、小さなモーターボートの発着場だったようです。

② 山田港の歴史

草津市立草津宿街道交流館学芸員 岡田 裕美

- 湖上交通の拠点としての歩み
 - 中世の山田港は比叡山延暦寺の対岸に位置することから坂本港と結ばれ、隆盛していたが、織田信長の比叡山の焼き討ちにより衰退
 - 近世以降、延暦寺の使者は北山田から日光街道を利用して東に向かった。
 - 近世は矢橋浦が隆盛となり、山田は矢橋浦に付属する地域として機能していた。
 - 明治期に入り、大津と山田を結ぶ渡船が営業を開始した。
 - 山田航路の利点は、大津側はこれまでの石場よりも便利な紺屋関発着になったこと、山田から草津までの陸路は矢橋よりも700m短いこと。

- 矢橋航路と競争となり、山田の住民・旅行者・それ以外の人で値段を分け、住民を優遇するなどを行った。
- 汽船の登場
 - 明治2年に加賀大聖寺藩が汽船一番丸を製造・運行し、湖上交通は汽船の時代へ
 - 山田航路にも汽船が就航、山田港には4航路6社が運航し、競争が繰り広げられた。
 - 一方、矢橋航路は運航数が減少し、急ぐ人は山田航路を使うようになり、さらに乗客が減少し、大津・草津間の湖上交通の主流が矢橋航路から山田航路に移った。
- 山田港の繁栄
 - 明治19年に大津の谷口、山田の杉江らが中心となり、湖南汽船会社(後の太湖汽船、琵琶湖汽船)を設立。翌年浜大津－赤野井間を運行していた三港社が倒産し、湖南汽船が堅田以南を独占的に支配した。
 - しかし、明治22年の鉄道開通に伴い、地元の生活航路となった。
- 資料から見る山田港
 - 昭和12年発行の「太湖汽船の五十年」には、最も短い航路として紺屋関・山田を紹介。夏季は40分間隔、冬季は約1時間間隔で小型汽船が往来。ローカル航路で貨客相半し、乗客も釣客を除けば遊覧客は全くなく地元の交通便のために存在
- 戦中、そして戦後へ
 - 戦争中は厳しい状況下で運行を継続、山田での食料の買い出しや疎開する人が利用
 - 戦後は昭和43年2月28日まで山田の人々の移動の足として利用
 - その後鉄道や公共交通の発達、道路整備による自動車の普及、琵琶湖総合開発などを経て、交通の拠点としての山田港から漁業の北山田港に移行



写真2 学芸員による解説

③ ワークショップ

ワークショップでは、前回の矢橋との対比もあり、なぜ山田が繁栄したかに質問が集中しました。山田の住民の方の運賃優遇制度の採用、草津－山田間の道路整備なども行うなど生活航路として地域住民が利用しやすい環境を整備したことがポイントであることを確認しました。

また会場には当時学生で通学に利用していた方がおられ、お話を聞くことができました。通学定期を利用していたので、改札は顔パスだったり、遅刻しそうになると汽笛で知らせてくれたり、少し出航を待ってくれたなど生活航路ならではのエピソードを語っていただきました。

その他田舟で大津に野菜を売りにいき、帰りは下肥を持ち帰った話などで盛り上がっていました。



写真3 通学で定期船を利用された参加者の方の発表



写真4 セミナーの様子

7) まとめ

今回は昭和43年まで運行していた山田一大津の定期航路の話題であり、実際に定期船を利用した竹川氏の話をお伺いしました。地元の山田の方も多く参加いただき、ワークショップでは各テーブルで思い出話に花が咲いたようです。参加者の中には、草津に移り住んでこられた方もおられ、今と全く異なった山田の話に興味を持たれたようでした。まだその当時の面影が残っている場所もあり、今回の竹川氏を始め、地元の方々の話を常に念頭に置きながら、これからの未来の都市空間デザインを考えていきたいと思います。

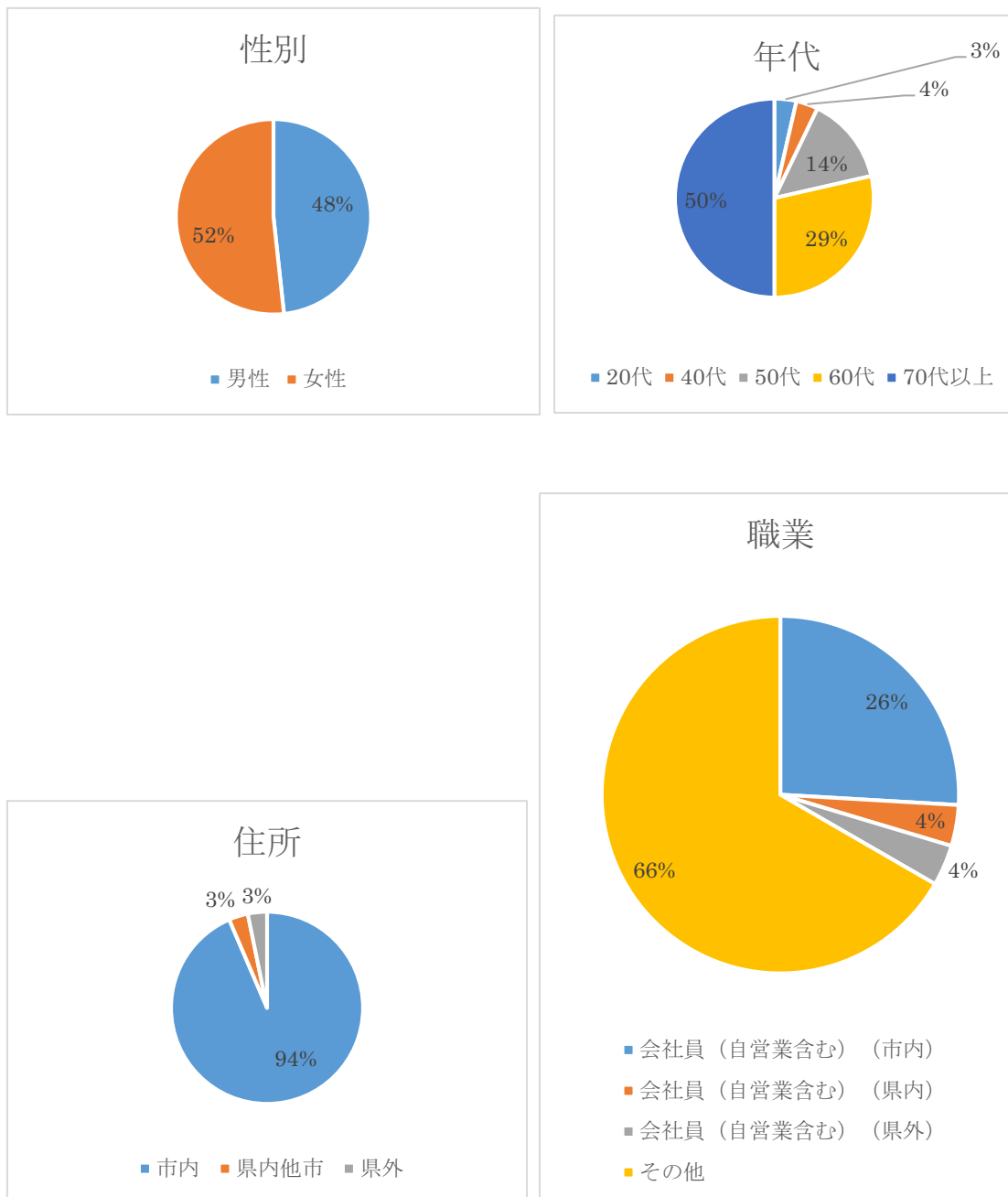


写真5 みんなで記念写真

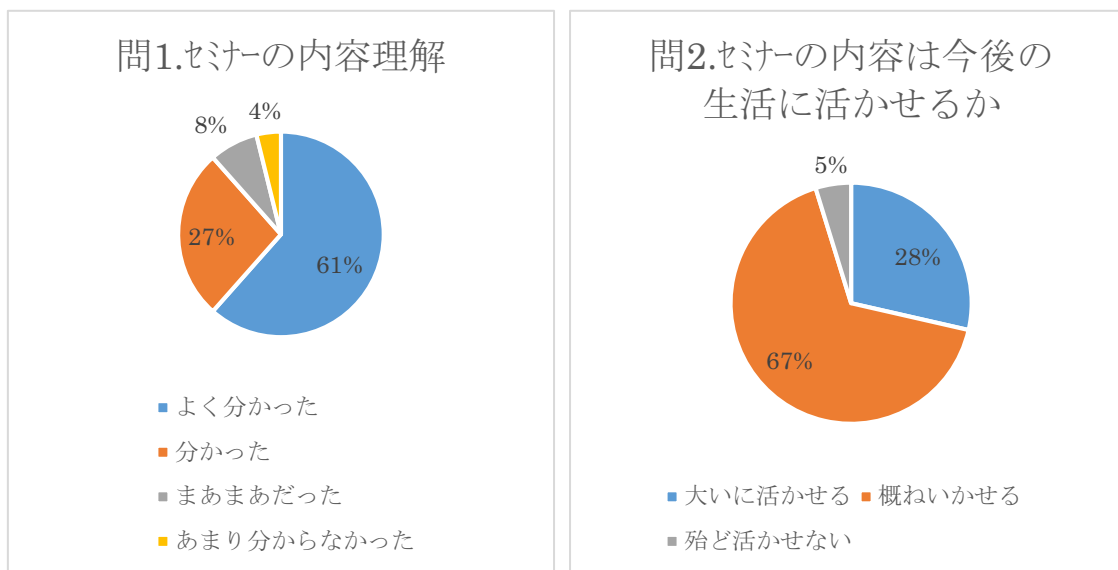
8) アンケートのまとめ

参加者 42 人のうち、アンケート回答者は 28 人、回答率は 67% でした。

① 参加者属性



② セミナーの内容について



③ セミナーの内容に関する主な感想、意見

- いろいろ考えさせられました。そういう意味ではおもしろかったです。
- なつかしく思った。
- 地元の人々の体験が聞け、大変おもしろかった。
- 私は下笠～山田に嫁ぎました。子供を昭和40年(1965年)に生まれました。(定期船で)大津の病院に行きました。
- 山田町の歴史にくわしく説明された竹川さん、ありがとうございました。
- 地元の歴史等語り継げたら良いと思う。
- 昔の山田港の様子がわかり楽しかったです。
- どういう理由で山田港、湖上交通がなくなったのかも聞きたかった。
- 竹川さんのお話がとても面白く多くの知見を得ることが出来ました。
- 我が町内の話であり、興味深く聞けた。義父も太湖汽船の職員として50年勤め上げ、日常会話の中でもよく琵琶湖の話が出て、いつも”愛ラブ琵琶湖”の気持ちです。
- 昔の事がよくわかり、いろいろ学ばして頂いた。